

菊山抄集
坤

中村俊定文庫

文庫 18

894

2





文月

泊船ニ文月の下アリ
誤りカ

初秋

來秋

一翁四捨集下

秋之部

杏江津より

又月や六りの岩の如ふに水は
又月や磯を感する秋屋の内

修海剛堂

又月や海をまき回のつとより
初秋や空をみぬのうたは秋の如き
夕の空やふらふらと秋の東ぬ

惺庵西



馬著



秋日

残暑

新涼

冷

西雲花故事三殘暑志下トアリ

身二入

甲子紀行首述ノ吟ナリ

下二

秋のり結ありそめあつて秋をとり
 中野屋より路の旁へきき残暑哉
 あつて屋敷いそぎをせり
 林まきしききふむ草や所あそ
 知やしきききききききききき
 雲下り雲のあそびきききき
 寝しきすや肩へはけりおろ
 江上の破屋をききききき
 神さしきききききききききき
 舟ふしきききききききききき
 父の炊きききききききききき
 若たきききききききききき

稻妻

稲妻のうきうききききききききき
 二折しきききききききききき
 けり妙筆のあそびきききき
 林まきしきききききききききき
 雲下り雲のあそびきききき
 寝しきすや肩へはけりおろ
 江上の破屋をききききき
 神さしきききききききききき
 舟ふしきききききききききき
 父の炊きききききききききき
 若たきききききききききき
 いまわきききききききききき
 粟津ふき

いねらちや湖の如きもさびしうなり
 亦るまゝなる電子族骨もゆの端
 被さるるもへる能きるふを盡す
 舞臺の壁ふりやなりやふく
 了生家の式せきまゝハ決遊小
 ありあらんやうに福譲を控へ
 しく終ふまゝうつくをいつの
 きふの只此の生家をいふまゝ
 せきねり
 以つちやや類のくまらうまきり
 稲妻や雲のうらり正位の新
 葉山ねくまゝ後子めをえ

後曆山賦

世をく
 楸つちやや類のくまらうまきり
 いねらちやまきのふらり
 海を眺む
 稲妻や朝霞ヤタたるまゝ
 雄水権現あり
 稲妻ふきりぬ神子の目さ
 いまつちのこまきまをり
 寺崎丸山あり
 楸つちややの傾城
 夜舟よりよる海を
 成る

花火

舟唄

檜舟や舟明りのちの舟唄
 いねつみのわきをさるる舟の上
 小屋まじし花火の筒のわきを
 一まう花火をもちきりひりり
 何りの時代をたぬるる四圍
 へ趣く人々
 大ふそくやとるる硯のふら
 桐椽や木をさくむらさきの夜
 多ふそくや花火の筒のわきを
 桐もや花火の筒のわきを
 名月の秋のいづれに人々

桐機

舟唄トモ野童事トモ前書アリ

大ふそくやとるる硯のふら
 桐椽や木をさくむらさきの夜
 多ふそくや花火の筒のわきを
 桐もや花火の筒のわきを
 名月の秋のいづれに人々

左ト此辺ノ漁父ノ妻娘ノ事ナリト自註云リ

星待

硯洗

星迎

桐機をよとるるやとるる舟唄
 舟唄のいづれに人々
 大ふそくやとるる硯のふら
 桐椽や木をさくむらさきの夜
 多ふそくや花火の筒のわきを
 桐もや花火の筒のわきを
 名月の秋のいづれに人々

星合 延寧中吟す

五元ニ双林塔ニ作ル
借字ナリ

二星

海をりともくつ海の心也 一 返 一
 名不ハ體のうち
 那^ノ之の中やた^クあん^ニ龍田川 一 菊
 星^ノ之や人のあ^ラるを^ハあ^ラす^キ 一 空角
 比^レ教^ハ小^ノの^ハり^テ
 海^ノ一^ハあ^ハむ^ヤお^ハ輪^ノ標^ノの^ハ終^ノの^ハる 一
 星^ノ之^ハや^ハ山^ノ里^ノ持^ハ一^ハお^ハ務^ノ能^ハひ^キ 一
 那^ノ之^ハや^ハ替^ハ女^ノ也^ハ移^ハる^ハい^ハの^ハ末^ノ一^ハん 一 岩^ノ重
 星^ノ之^ハり^テ家^ノ妹^ノ一^ハら^ハん^ハ待^ハ女^ノ郎 一
 夜^ノ明^ハま^ハる^ハる^ハ中^ノや^ハ二^ハり^ハ一^ハ 一 女^ノ学
 素^ノ骨^ノの^ハ母^ノ七^ハ十^ハあ^ハる^ハり^ハ七^ハと^ハそ^ハの^ハ林 一
 七月^ノ七^ハら^ハふ^ハあ^ハふ^ハき^ハい^ハま^ハふ^ハあ^ハ葉^ノ葉^ノの 一

星秋 杉風家藏七種
 物ニ秋の千本ナリ
 百五十年來款の手本ト
 誤り来リ

星合雜

銀河

七^ハと^ハそ^ハを^ハそ^ハ影^ハと^ハそ^ハ是^ハ小^ハつ^ハ
 那^ノ之^ハ者^ハ七^ハ人^ハは^ハ結^ハ縁^ハ小^ハそ^ハそ^ハ又
 七^ハ波^ノの^ハ歌^ハる^ハあ^ハん^ハん
 七^ハ株^ノの^ハ萩^ノの^ハ子^ハ本^ハや^ハ那^ノ一^ハの^ハ林 一 菊
 那^ノ之^ハ雨^ノ星^ノ一^ハ文^ハあり^ハ男^ノ
 言^ハ水^ハり^ハ星^ハも^ハ括^ハ森^ハ也^ハ岩^ノの^ハり^ハん 一
 名^ノ秋^ノの本^ハ能^ハ葉^ハり^ハも^ハい^ハ星^ノの^ハ歌 一
 當^ハ是^ハや^ハ大^ハ角^ハ豆^ハハ^ハ那^ノ一^ハの^ハ玉^ハう^ハん^ハ 一 空^ノ角
 出^ハる^ハ鳴^ハり^ハあ^ハん^ハ
 蒼^ハ海^ハ中^ハ依^ハ後^ハり^ハ横^ハく^ハふ^ハ玉^ノの^ハ河 一 菊
 大^ハ切^ノの^ハ板^ハハ^ハあ^ハ希^ハふ^ハり^ハ玉^ノの^ハ川 一 空^ノ角
 樽^ハ罌^ハう^ハび^ハり^ハあ^ハる^ハ玉^ノの^ハ河 一 空^ノ角

其和申やふしつをうたふ詠河

梶の葉う小唄うくく

家や身ぬひく敷より糸其の川

大伽藍造葎あしききまの

今日まきくまのこはる小舟士

筑波松の弓ふ更ふゆひつ出

来たるうくく空の白ひもちく

あゝへきあゝぬりきき

上野よりそや付らんあま秋川

おをくく約のうらわそこの海

鵲橋

のきく知わ石を重石の橋もあり

其角

雨後

池坊立花

梅もあふ物もいづき夕のうら

飛香井難波より蹴鞠と平の

坊のまきみやま秋田まきまの

風流まきま見らあう春をうたあり

秋風のうらけをのそく立花うら

まきまうらまふ入葉ハあーうら

あひまきまその芳をいそふ

まきまあ切あゝまきま

秋のうらけをいそふ秋やまきらり

夕のうらやまきまあけの物まきま

市寓

嵐亭

其角

菊

蓮賣

燈籠

西側を燈籠臺の石や之々の内
見ると人よりとらふものあり
若女若男燈籠ふもよまひ

年中

冬もさへ林の門の燈籠の
おはひもくまもくまのほ

昔池や折るもそのあり
加賀の國をさるるも

然板のやりのやりのた

寺部山

沼まらうもその懐場の

尾妻にあり方あり

迎鐘 七月廿六道参
前文あり

翁州ニ慈母とてやふあり

教あるのふも思ひを

吾會

可くもさふの結ぶるの

おのふも人や隣の玉

たまふあり門のを良の

眼のそのもく水もさ

結柵ハ露もさるるも

玉糸母屋の書戸の

たま柵やこれあり

いの字

壺柵の粟う先もつ

たま柵の粟あつ

玄

妻小中をくく人の行ま
森を具のうくくやう知認ふ
聖堂の隣出りや山のうへ
煮里小踊り

墓

聖堂くくくくくくくくくく
たま柳や藪末をくくくく
聖堂のうへくくくくくく
聖堂のまのくくくくくく
甲戌の秋大津ふくくくく
くくくくくくくくくくく
煮里小踊りくくくくくく
あはくくくくくくくくく

苗屋半七義濃屋於三十一

あの杯や英濃やくくくく
名のぬくのくくくくくく
蓮生の露くくくくくく
はあはくくくくくく
くくくくくくくくくく
戒名風を有思くくくく
船入たりあくくくくく
くくくくくくくくくく
けりくくくく

妻小中をくくくくくく
森を具のうくくくくく
聖堂の隣出りや山のうへ
煮里小踊り
あはくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

送り火

送り火や家家の幸あり十文字
おくり火のゆりのちや家の敷
お字

大文字の向きもあなをる雪

のあつらの出きるおくり

大文字火

山の端を雪ふも尻をや大文字
嵐雪

妙法火

松ヶ崎ニアリ

煙を焼火の雪まや林のこき
生身霊

生身霊

生身霊酒のりぬ親仁の如
生角

得半酒

陌上塵

淵明う降あつめや生身霊
生角

踊

一本屋鎖を扱ふし踊うの
生角

伊勢の鬼見うしあはた踊か
生角

小娘の地まきうし踊
生角

きりり子と鳴りハ畑の雪ぬのん
去来

嵐雪う四國ふわさう時

二百十日

松のうき二百十日も
去来

相撲

角鬘や勇を歩相のまきふより
去来

おのしきけ緒父殿まへ角力と里
去来

侍古き書り

勝まきふりつれと子り末の良
去来

上子取くあは優美さうまきふり
去来

と知念のまきふりや角力と里
去来

扱らるる雪まきふりや角力と里
去来

角力取まきふりや角力と里
去来

おみと伝ちりりや角力と里
去来

扇置

露

松三草鞋懸りタル馬
譚ト云り

丸窓のそとにさきさきあつたき
の心枝くわのきふきく

そのあつた扇ひききくあつた
菊

芳野西の窓あつた

露くくあつたふ浮世きくあつた

虫債

西の窓のきくあつた松の露

昔あつたあつた

あつたよりやま付きくあつた露

二見の浦

あつたくくあつたふやあつたあつた

一草窓の窓の窓を制し

白露のまじりき味をわきあつた

周信くあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

十草のまじりあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつた

駒取童くあつたあつた

句集襟を尻あつた

朝夕あけくふきの袖の露 志未

嵐茶遊悖

子貫の剣ら見ちり子の露
 遊女常盤方ちりきり露
 以てそお志重りなる人の中
 露ちりりは露の外能かうけの
 山嵐崩れきりけり遊茶才女ゆの
 地ありまのあきり士崎地を拂
 若くをきり日月のちめちめ
 をひくくくくくくくくくく
 一々美茶子愛き侍人ゆゆ
 若きまも女子文人ゆゆをけり

霧

箱根ノ奥ヲ越エテ時ノ吟ヲ

ふも霧をきりきりきりきり
 山根姑射の山の神人きりきり
 霧くきりきり画をきりきり
 霧霧の暫けりる茶をけりきり
 きりけりる士をきりぬりきり
 由井ヶ溪
 朝霧けり一のきりきり
 朝霧けりや霧霧霧霧霧霧
 霧霧や霧のきりきり
 霧霧の山水
 川霧霧や霧霧霧霧霧霧霧霧
 霧霧

親身や雲のそのふるくせん
終若山 去来

馬の口よりくくを露のそふの

憐^{アヒム}捨^ツ子^ヲ

猿をゆへんをくふ林の風はふ 翁

義朝のま後ふ似たり秋のこを

秋風や藪も留もふ破の雲

身より去るく大根のくく 秋の風

一笑追美

境^{ワカ}より去る我泣をうの秋のこを

途中

あつくくくつをふくも秋の風

秋風

甲子紀行二前
文アリ

又同上

那谷寺の石さあくぬ古松

枯をくへく跡のむ地あり

石山の石より去るく 秋の風

加賀の山中 樹天小石をく

松の末能きり葉くくも秋の風

伊勢の國 宮治中村をく

秋風や伊勢の暮をく 秋の風

秋風の吹くもく 栗の鉢

坐右之銘

人の短をくくく 好のそくくを

説くくくを

物いへるくく 去るのこを

花摘 秋の風より

小文庫初めし吹くもく

予蔵書ハあまれさむら
トアリ

残暑ノ吟ト初真のそふら
好のよきト何カ再共ニヤ
秋風ノ吟ニ哥仙アリ

高木伊勢記の跋

西ひりーあつきさ同ー秋の風

懐松倉嵐景

秋風ふをそくーの所き葉の枝

中津屋ふ枝のそくー秋の風

雪水う枯行をそく

見物りのうし枝やさびー秋の風

秋風のあつらうあぢぬ娘とそく

浪花の過ぎいくつあまのうせ

采居

病る老をまきそふ水たり秋の風

けり末のあをゆきそや秋の風

秋風や白木の弓ゆ絵をー

吉備津金巻納

秋のそや鬼よりひく吉備の山

あまのそもあぢぬまう婿の海

白川や屋根ふ石おく秋のそ

吉備津川

秋風う耳の垢をそわー

江の島

白きお心海そのあまーや初あじ

七月廿一日工高三回忌をそく

碧海海をそくあひそそく

海守松形寺念佛堂

初嵐

秋声

秋空

秋元ニ杉をトアリ
炭俵杉子トアリ

三人の聲ふあゝへよ秋の聲
秋の音尾の杉の音水音大り

音獲院めく

櫻の木能をもまめくや秋の虫
去来

松枝音の松の音
ソラヤアキミツユリハナスヤマオ
乾兌坎震離艮坤巽
音角

秋雲
伊賀へ志村地まき、作めく
いひねをく松の音もあまの音
秋の葉能地りまめく秋の雨
幻信庵めく
松病中森冷まらふ秋の山
音

秋雨

秋山

桐一葉

イニミハ一葉をトアリ
とせぬトアリ

秋水

秋山や弱もゆるめ秋の音
音角

お横川浩哉水接天

秋の浮木りの音や秋の水
去来

秋の水流能音根をくあまの音
去来

秋の音ゆるゆるの音も秋の水
去来

秋の音ゆるゆるの音も秋の水
去来

音獲院めく

秋の音ゆるゆるの音も秋の水
音角

音獲院めく

音獲院めく

音獲院めく

音獲院めく
音角

散柳

一葉らりいづるもちりる月夜に 嵐雪

柳陰軒あり

ちる柳ありし秋も鐘を竹 霜

全昌寺あり

庭掃く出るやさるちる柳

花木様もさる寺のこころうら

るとの竹

道の辺の木様のるる縁をとり

もき原や一夜ハヤと山の大

ひらり吹く遊女も花さるる月

観水亭

ゆきをふく人もさるるや雨の秋

木槿

延宝ノ吟画賛あり

萩

甲子紀行ニ存の迎下アリ素
堂乃序詞ニ存もト花ノミ
初葉張ルハ萩ノ花
萩のりトアリ
又片の花ト後日記ニ
英ハイカニヤ

まきの向の小貝拾ふん種

流し紙をまじし法華さまより

小萩ちせせむる小貝小さのき

浪のるや小貝ふす萩のちり

画賛

志る萩もあさる萩のうけりうら

萩半玄孫子の庭あつたけり

をるる

風をや志るらるる萩の萩

文の萩最集ふあり

萩の萩拾貝くくさるうら

毒海と巻我子の戸あり

芒尾花

吉原日本堤

おのりゆるきを葉りて

何よりおのりゆるきを葉りて 菊

何勢跡のやち松

松の圃やまを葉をのちて小松葉 其角

七世を愛理をわたりて

角よりやいさの理の葉を葉りて

二見あり

岩のりて神風をわたりて 葉を葉りて

在東寺あり

僧侶の志をわたりてふ芒のりて

二河茶屋

白馬の尾髪吹くる尾を葉りて

遠里小町の尾を葉りて

霧の白き尾を葉りて

四の宮小町あり

岩塚中のさびさびさびさび芒のりて 嵐雪

雲津川あり

葉を葉りておのりゆるきを葉りて

品川へ二里のゆるや葉を葉りて

尾髪を葉りてゆるきを葉りて 玄来

今より二里ゆるきを葉りて

日見ゆるき山ありてゆるきを

とて

おのりゆるきを葉りて 芒

女郎花

此句古集ニ所見
ナシニハ本の書損カ
笈日記ニ云クテ云々トアリ

玉川の氷りおあせそ女郎花
雪のうらぐらぐら流るるや女郎花

瓢の銘

末のふ知時を瓢をさしぬ
一夜ふ裁とてあやうき

沛城へい何れ入やうをさぬ
角

敦賀寺茶院

門ふ入の種鉄ふらにの白ひぬ
てふといふ女装句をさすふ

茶の多や蝶のつとまふ茶をさ

茶院同肆

茶をさる茶やと名の藁の下
嵐雪

蘭

泊船蘭茶蕪鉄ト
誤ル

甲子紀行ニ文アリ

朝顔

甲子紀行ニ文アリ泊船句撰
死のうとアリ

草の戸ふ我ハ慕とて虫ハ
其角

南大寺ゆ信て庭上の松をん

まう元をさす経をさす

信をさすやゆ死に入る法の松
角

和其角茶院句

朝顔く我いゆとて男この水

嵐雪う虫ふ蝶のそふあをさ

おのあふ下ものむさくあをさぬ

人と部おり送出る三平を

ゆけ侍ふ

あさうゆを酒をりさぬさうり

岡笑

おのちやとてさ鉄おらま門の垣

風俗文選ニ文アリ

朝の白や雪のまじり我友あはれ 菊

あるはけけりりあまのなをたる

扇うほききあり

朝の白や扇のあはれを垣根うれ 冬角

市中の深居

草子やまよひ見ん人のけしき

朝の白や雪のまじり我友あはれ

あるはけけりりあまのなをたる

朝顔の仙の模をいのちのけしき

あまのけしきををいん人のけしき

朝の白や雪のまじり我友あはれ

草子やまよひ見ん人のけしき

丑元二朝良荒野二菊の露トアリ

秋海棠 イニ画賛トアリ

角觥草

草花 イニ畫桐トアリ

花野 イニ富士小横トアリ

朝の白や雪のまじり我友あはれ

あるはけけりりあまのなをたる

朝顔のまはれあまのなをたる 春雪

あまのけしきををいん人のけしき 春雪

秋海棠あまのなをたる 菊

朝の白や雪のまじり我友あはれ

草子やまよひ見ん人のけしき

草花イニ畫桐トアリ

花野イニ富士小横トアリ

あまのけしきををいん人のけしき

朝の白や雪のまじり我友あはれ

あまのけしきををいん人のけしき

蜀黍

延宝六年吟

萩

三芦の穂トアリ

蜀黍や新搦の萩のしうちの
萩の穂や 穂をほのむ羅生門
、 霜

盆の三葉を切影あしう一字
を採る 洗

澄くそくをくふあき萩の考
、 霜雪

草舎の感

芭蕉

天和初年吟あり

とそ城壁かしく響ふるを竹杖
此寺の庵一すみのほを杖こりぬ
、 霜

畫襖

習ぬくやその勢ふ芭蕉破ぬ下
、 霜

酸漿

鬼灯の言ひ葉もくくもさうちの
鬼灯のうらさ見はくや煙の香
、 霜
、 霜

若煙草

瓢

曠野夏ノ部ニ出セル
イカニヤ子鳥掛ニ初
秋ノ洞室アリ六七ノ集
中或ハ夏トシ或秋
トス

西瓜

里右う娘うしあむちふそき

鬼灯のさきれははくそ歌うぬ
、 霜

たそ六千き山田の畔の夕日この
、 霜

かきも白よりこのまきか 詠る煙草この意

初林中の一日は雲あかすまき

瓢の影をぬ

夕のわや林をきくこの瓢うぬ
、 霜

葵のうらぬる男の控つてたの

あやうさあこうかき

西瓜ふぬの瓢はあかの香をり
、 霜

あひらうさきくまらこのる西瓜
、 霜

あやうさあこうかき 控はく西瓜
、 霜

冬瓜

故人より逢り

冬のやみけうきる類の形 霜

懐仙風

子向きりいそひ蓮ふねのさき

西行公

芋あふふ西行あふふ類よあふん

嵐葉一子孤慈をあそむむ

芋ののちをそ枝の枝をもちあふん

芋をさうあそむるをそ枝のやうい

ゆきくのゆきあふふ類よあふん

言川

芋あふふ人よりあふね類よあふん 去来

芋

蕃椒

道の惟然と書よりあふへいふ

嵐よあふの芋をあふの類よあふん 去来

大風のあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

本宮殿の庵をよむあふあふあふ

人よりあふあふ

芋の戸をよむあふあふあふあふあふ

加賀の園より入

芋のあふあふあふあふあふあふあふ 去来

芋のあふあふあふあふあふあふあふ

四とあふ

芋のあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふ

早稻

類柑子ニ分入る道
ト誤リカ

鳴子

早稲の馬や鹿の出きく鹿の舟
阿房のいぶきのいんきん鳴子川
吾越るぬき子の紙や巻の中

田舎

案山子

ぬくまのいふうしの 腰刀
右風呂の下やあまの子能の終り

虫

巻こくやまのし虫の形
浅茅生やまのりまのりまのり

病床

却のまの中ふ候あまの森
床のまのり新ふ入やまのり

茶

酒堂の軒ヲ園玉トテ
猪の云ハ再葉ノヨミナリ

句撰机の誤りカ

白髪ぬく松の下やたのりぬ
まのりまのり新ふ入やまのり

加賀の小松といふふ右田の神社
能宝地といふふ宮巻う巻のり

まのりまのりまのりまのり
まのりまのりまのりまのり

おまんやぬのりまのり
巻のりまのりまのりまのり

鹿倉木香あーの酒を經る地獄
巻のりまのりまのりまのり

巻のりまのりまのりまのり
巻のりまのりまのりまのり

竈馬

たるうおし
 おのきさへ縁鬼中たさきりくは
 悔い人のもきれや起りくは
 泣きあふふ人押さきりくは
 物のまききや福の起りくは
 方燈り飛や袂乃夢案くは
 空きききく空の啼ききりくは
 森のりりのかこふおしあや
 起りくは鳴やあまの孫の下
 ちりり子の帰りまぬおし
 海士のあまふ小艇あまりくは
 夜過り

鈴虫 松虫

ちりりや鳴松先へ花さきりくは
 おろりちりり松虫さきりくは
 葉松認めりくは
 松虫のまじりくは
 子の庭りけりくは
 鳴りくはれ友ちりりの方へ
 ちりり

蓑虫

聴閑ト前圭アリ

蓑虫のききりくは
 甚意意へちりり
 何と音もぬりくは
 ぬきりりちりり
 鳴りりちりり
 鳴りりちりり

秋蟬 蜻蛉

何と音もぬりくは
 ぬきりりちりり
 鳴りりちりり
 鳴りりちりり

鹿

白選 鹿をきくトアリ

鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿中

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

木

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿をきくトアリ

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鷓

鷓

鹿の角トアリ

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鹿の角 鹿の角 鹿の角

鷓

鱸

沙魚

雜

古今抄三州紙二小葱
吟殘暑ナリトテ浮菖
七月ヨリ碧花ヲ開ケ

浪龜の鳴く遠よるゆふの如
 晴まききりききをの晴まき
 疾りあむらききりきき
 志州二段川を河舟空下り
 多小推河船くふお道水大切所
 きあきき
 打櫂り鱸まききり測のき
 黒崎あき
 桑江のうき浪る灘ナク女中鱸糸
 多々お中水村山廟海程の風
 多まらきききき上の鱸の腸
 小松とゆふあきき
 去来
 去来
 去来

八朔 延宝年ノ吟ナリ
 暴嵐
 二石ト誤ナリ

去来
 子之と黄梨うき
 高安をのきり山の二人うき
 夜人の枕とくききき人の
 去来
 先代を何くの浦お訪ふ
 八月や浪のまききききき
 名水ハ龍のうき
 八節や玉のききききき
 秋もききききききき
 去来
 去来
 去来

夜寒

甲子紀行續唐栗ニ
多其ヤトアリ曠野ニ
ヤノ字アリ

弓破海集を祝
管の葉や望みうりしるる破海 去来

曲響多影夜寒

乳麵の下なきまゝる相寄うりぬ 翁

病入る撞木ぬ寐さるよきむうぬ 文學

友まをの舟ぬ寐つゝぬ秋寄れ

の層見望山麓ニ

曉栗のまも飛りしよきむうりぬ

よー時少々

砧おつゝぬぬやせまや坊々葉 翁

をり澄々お斗ふびくきぬく世

猪ひきいささのふ袖を砧のぬ

秋夕ニ賊ノ一柄話アト
壬真偽不審

三日月

嵐蘭八月廿七日没初七日ハ
九月三日ナリ

近江流を通り付る此日望の辺を

おナとのふをのふ上のきぬをぬ

剃をたる乃ふま砧のぬをぬ

あるも若のぬをぬ

中の望りぬ寐ぬ子素人ぬ砧 産角

まの語入る素牛ぬ

砧まのん孫六やまき志津屋 地

新巻

才根のきを仕舞いまぬこうぬ

とや月や新巻のゆふに法をぬん 翁

三日月やまやまぬさるまの露

嵐蘭初七日

笈日記ニ云々あり

駒迎

待宵

名月

延宝年中吟

尺一やその七のハ巻の三の月

大寺招成能隆より論るさふ

何もの心々互みの悦々三の月

駒ひきの木もやせん三の月

樹やあつたをひひつあつたをひひつ

一の戸やあつたをひひつ

待宵やあつたをひひつ

武蔵守嘉村仁雲を先と一政

ハ慈を去るをひひつ

名月のあつたをひひつ

重くとも名月のあつたをひひつ

般若教誨

元禄四年十月吟あり瀨田の橋ニ作六非カ萩の露ニ残暑ト前書アリ

小文庫ニきり込トアリ

名月や水園のよりさためあつた

名月や水園のよりさためあつた

名月や水園のよりさためあつた

名月や水園のよりさためあつた

名月や水園のよりさためあつた

名月や水園のよりさためあつた

名月や水園のよりさためあつた

深川

名月や水園のよりさためあつた

伊賀山中あつた二句

名月の花のよりさためあつた

名月や水園のよりさためあつた

名月や池をめぐりて水の音を
、

等哉うるあひや

名月の名品心ん松蔭きん
、

三日糧をほこむらふら

名月や十歩入り跡を握りきり
、 空角

詩多き如

名月や津重の鼓こりてさ
、

名月や赤い燈台のほく左島
、

名月や竹をきこむむらさき
、

名月やうすやうさうす袖は惜
、

名月やあまの草もあまの草
、 嵐雪

名月やわさしうふわさる勢多
、

名月やきりぎりす水のうへ
、

名月や絶える流のひらうら
、

名月やきりぎりすのせき
、

名月の笠友城ハ男一ツ柳
、

鎌倉大佛

名月や南をぬきり佛頂珠
、

名月や柳の枝を空へあは
、

名月や歌人か葉のあまうさ
、

詞書略

里志寺名月の雲をわきあり
、

長崎より四日か松森をうり

幸ふ時

名月やたのしみききある 松さく語 去来

名月や極まりあるきき 春の音 一

名月やむらふの 柳屋照さきき 一

名月や海も地もをくみ思ふ 女学

名月や車輪くきききき 一

名月や雨りききききき 一

荊口ふききききき

名月のあへききききき 一

清涼紫雲のあへきききき

能くある中り

新月

新月や内侍の 梅能州 去来

新月やいほきききき 一

義仲きききき

三井寺の門をくききき 一

木を伐りききききき 一

琵琶行をよむ

十五のうらみのきききき 一

本うきききき

烏帽子屋のきききき 一

新巻吟

汐波をうききききき 一

詞書略

今日月

萩の高ニ文アリ

信濃の川老の子ありけり月
船の影を江戸に生かす月あり
川筋の筑屋のつらき月あり

吾妻亭

舟より入目をうけきこむ月
本母寺の鐘の音ありき月
吉野の山と峰つらき月
おきき船のつらき月ありき月
仕立の山と峰つらき月
舟より入目をうけきこむ月
ひそかの鐘の音ありき月
鯉の鱗のつらき月ありき月

十五夜

月今宵

月見

遠き海の珠のつらき月ありき月
舟の影を江戸に生かす月あり
形もれなき月ありき月

秋の月ありき月ありき月
十五夜の月ありき月ありき月
月ありき月ありき月ありき月

月ありき月ありき月ありき月
田家
舟の影を江戸に生かす月ありき月

清水の橋をわたる路をたずなりつと
いふ清水納言の橋をたずなりつと
むつのもちあふとと

おむつや月見の橋の明をぬれ
月見をたずむ江の善きつとぬ先

古寺遊月

月見をたずむ江の善きつとぬ先
雪折く人を体むる月見の如
唯路のく人あはれむ月見某

鹿島松本寺

ちよと橋をたずむ江の善きつとぬ先
娘をたずむ松本寺 月見の如
雪

初蟬二名月やトアリ

浄土舟の修り

おむつや月見の橋の明をぬれ
言笑ひ月見の人あはれむ月見某
浄土舟の修り 志

盲より 唾のくくゆき 月見の如
月見をたずむ江の善きつとぬ先

黒い方より 思ふむ 橋の月見の如
世修り 志

浄土舟の修り

おむつや月見の橋の明をぬれ
言笑ひ月見の人あはれむ月見某
浄土舟の修り 志

浄土舟の修り

十六夜 壬午山家三信濃
の國坂木かて前
言アリ

鄙懐紙韻塞三取とけ
闇のトアリ

月

舟引のそらうらふきあき月見うら お子
いさよひのあき文科の郡一りぬ お翁
打出の漢あき

十六夜や海を煮るあき宵の雪
望田十六夜

鏡のうら月きー入よ浮山雪
あきくくと出きいそふ自の雪
十六夜わらうらあきあきあき
十六夜あきあきあきあきあき
正秀あき初倉 あき

月代や膝うら子を望言の宿 お翁
川舟やよふ葉あき海よふ月夜

古物並うらあきあきあき

月やあきの袖の本能日の下西

あきあきあき

月やあきあきあきあきあきあき

あきあき

草のあきあきあきあきあきあき

月のあきあきあきあきあきあき

あきあきあきあき

あの中あきあきあきあきあきあき

あきあきあき

九夜あきあきあきあきあきあき

あきあきあきあきあきあき

雑談集三前文アリ

月正澄水う物まきいを徒於名
月のよき多ふいふを甚意をを

裁り

そを成業を移ふと申ん庵の月 翁

深川の末五木移りよふり

舟をさし

川上とあり川下や 月の友

東吹老人の酒よ生世を東

野小路をとれり

四月のあまの松の四海うぬ

又るこもやまの形も雪月夜

と善也庵あり

風俗文選二東順力傳あり

今よまに催しり燈の月十六里

畦止るり影月下送児

月まゆや松竹こもる児の信

と柳亭あり

秋もまやまの清くるり月の形

米くま友をを言の月能家

姨於山あり

おまのまや姨をりり後月の友

と善光寺

月のけや四門ゆきもをひら

湯の尾

月ふ名を法とていふやの神

笈日記二まのふのうらら
ちのうららまのふのうらら
此句ノ初葉ナリ

嶺山

茂仲の森是の山より自出

翁

元禄二年つきの能湊より自を
己を寺比の明神より信遊り上

人の古例を仰

有法一遊りのをる砂の上

教習の法

月のもう雨より角力よりぬりたる

竹林の教習習ふよりぬあはし

の物終りには海小鐘の志らるる

侍るを國の寺にありて入る君

ま世路へは詠下るるふ落る引

あきへき候のあしつ

自らと鐘ハ志候める海の底

志のむもやれあはれあはの自

女日阿まりの有るまふん

山の根まふりたる新馬とる

鞭をたせり教習いませり

たきま社敷り早の跡まふ

夜の井山より到るまふ

地ろく

まふ孫る跡ま自遠く葉の烟

斜落る

戸をひくまふ西ふ山より伊吹

延宝年中の吟

云花あめよ〜を〜あめよ〜
只らそら孤山の海あり

そのあ〜月もた〜伊吹山 小

伊勢國又云々電ふ〜あ〜
るはそあ男の〜る〜物

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
を安〜〜〜の日向の

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜
あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

月さよ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

作是法天宮法印

所記を相念〜〜〜法の月

小文庫三月さび下アハ書積カ

句撰相念(二作)

山〜心の聲や水の月
消息

水あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

紫の庵〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

山家集あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

紫の戸乃月やそのあ〜あ〜あ〜

い〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

孤松二つありや

既をきしゆ

四月の廿七夜に三日の月 翁

神話山

二十日月に一軒の杉を控嵐

行思

月をみよ心法し一や十四日 寺角

長柄文彦の記

月をみよの橋乃杉月夜

唐丁の只袖をくしし月の雲

雲井ふのやをの終り

傘持の月ふ後をくまのこ也

巴江

新しうをを糖の音へ一峰の月

維摩の鏡

山の端を大衆をり市り床の月

最源

高よりそををくまや等の月

布衣翁

里より水の水の月をくま

寺の月蒲萄眩ハ葉ふをくま

池あり七をみあり 宵の月

月出をくまのこくみく小毎の月

燃板より大のはきやをくま自想が

一頁はる

月明の月ふりあり母のこけ
とふふ——いふのふりう碓の月 氣重

吉崎素行の事

浦人を寐そと海見る月夜うれ 吉来

長崎の詠話の社を

昔をよみよりのたふも詠話の月

初子を送葉——

いふる初の内も見ふふり月夜送

日如見る雲ふちの——月の夜

岩をぬやふふもひらう月の夜

誰くも来ちらん月夜を

独の寐ふり——やゆり月

東風よふ春の月ふり僧仲る 吉来

いふ指をそりふゆり雨の月

出せり来たるふむ月夜うれ

戸を閉て月の夜しや雲の上

壁山ふり月の夜しや雲の上

六助六の歌の二人ふり世を

訪をうたひのあそびを

いふ子里隔つ指をひや木のうれ 吉来

むさし雲を出し時の夜を

おそひし指をひや

死むとぬ指をひや木のうれ

梅郎の死をうたひ——木のうれ

秋暮

延宝九ノ東日記ニとあり
 なるがトアリ又とありたり
 やトモアリ再々案ノ上曠野
 ニ出シ玉フニヤ

爰日記ニ人初やまをこふ
 ト二句有泉儀此道や定
 るトアリ

可き枝より誘のこまうたり枯のそる

雲竹園畫像

あつらふ而も我れさきき枯のそる

所思

此は昔やけ人なりふ枯のそる

阿きのそるあうそりまう中

春海や浅黄ふけりて枯のそる

悼ニ高

其人の斬さ人なり枯のそる

思初のうしろまきこや枯のそる

舟中

あつらふの勇士うまふや枯のそる

所思

本虎のひきりあひや枯のそる

林のそる石の寺の鐘のそるは

空

舟楫る管屋の林能くあへ草

そるのそるあひくは枯のそる

立あつらふしろあひやあまのそる

森のそるあひくは枯のそる

うけ人をあひくは枯のそる

三遠寺納

里松海や松をあひくは枯のそる

野店無着換

新酒

稻

是あふる字ふりハ新海うれ
我を〜新海ハ人の碇中まき
人ふまをき〜む
霜重

落穂

その中ハ穂のるあろう子の産
穂りあまの甲ハ甲も時あし
穂あ〜中穀を振る葉の中
いほ〜のふ穂を干き粥や大井川
いほ〜のふ穂を干き粥や大井川
霜重

田家

初茸
松茸

句撰ニま〜う〜
ぬトアリイカニヤ

産きの卵ら〜産〜落穂茸
その茸や〜の産茸ハ林の産
松をけや〜の産〜ハ松の取
霜重

付ト文字ニテアリ〜ト
読ハワロシ

榎茸

茸狩

松茸や〜ぬ本の産の〜付
松をきや〜ぬ本の産の〜付
好ま〜ぬ本〜ぬ本の産の〜付
茸〜や〜ぬ本の産の〜付
女中の茸〜付
茸〜や〜ぬ本の産の〜付
松の産の産〜ぬ本の産の〜付
茸〜や〜ぬ本の産の〜付
霜重

木犀

りま〜の産の産〜ぬ本の産の〜付
木犀の産〜ぬ本の産の〜付
霜重

初紅葉

紅葉旦散

遊女の畫像

芙蓉

後走二日毎トアリ
芙蓉自画賛云

雞頭

下世八

山崎くみゆき 地をくわ 初紅葉 一角

枝少りの夕べく ころもる 芙蓉 一角

鶯のや 居のまゝ 時程あり 一角

カマツカ 移るや 移るまゝ 法の宗 寺 一角

移るまゝのまゝ 移るまゝ 移るまゝ 移るまゝ 一角

後醍醐帝の法陵をおとす

蕙

蔦

涼莞ノ句云未詳
韻塞ニ蔦紅葉トアリイカ
ニヤ

清廟系を經る あり 何を思ふ 一角

菊のや 竹四五本の あり 一角

樹のや 移るまゝ あり 一角

花のや 移るまゝ あり 一角

葉のや 移るまゝ あり 一角

葉のや 移るまゝ あり 一角

葉のや 移るまゝ あり 一角

葛

菊花

一角

一角

藍花

子布を南(四)塚のあさり(河)を
島原のふも海をわきをさすけ
難波津あり
藍花

芦

芦の穂を若うらうらやあひの強
あひの穂や秋をよ上るはまのり
なまき 何の形像
女
学

薬堀

わらふを春中ふ負て薬堀堀
川苔のあさりあさりわきの水
子里の春里あり
生
角

綿

わらふや懸懸ふあさむ井の美
木綿とるるるをたしめ生約山
おさう牙をちあつう新巻を繋ぎ
生
角

粟

泊船句撰脊戸の秋
下誤八

お家や春のあさり春戸の粟
氣を説
去
来

蕎麥花

三日月日記三日月やとらう句
撰三日月の二誤八

面杖杯を繋つらう粟の氣をい
伊勢の針ほり山を紡ぎ
そははさのそははさるる山はうれ
三日月の地はあさりそはは細
いせ原
生
角

横雲やそははさるるのそははさけ
同功あり
生
角

浪山の蕎麥らあやあさり
望田あり
去
来

鴈

病屋のあさりあさりあさり
生
角

浦の舟や道に交るわづら

其崎の松窓のあかり

あつた今もこの庭や海に

山を水や海に流るる水の勢

林麓下山

河を流る杖をさす中なる禁う水

木塚の入とり市菜菔の如

山存のふゆもあまのなつ

老の石鼓ありとも志す四十雀

小鳥夢長唄

四十雀小舟の中は五十

鯉のこの中思ん買の

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

檀鳥

啄木

山雀

四十雀

鯉

洪船

鯉

秋夜

長夜

後月

水青の船をさす中なる禁う水

山中十景歌多遊漁火

この里史子河麻や浪の下をさす

車角亭

阿きの秋をさす中なる禁う水

秋夜の舟をさす中なる禁う水

老の石鼓ありとも志す四十雀

仲林の月をさす中なる禁う水

この里史子河麻や浪の下をさす

阿きの秋をさす中なる禁う水

木塚の入とり市菜菔の如

石山に結るる水

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

、
、
、
、
、
、
、
、
、
、

升市

栲栳の志のふい月の名跡の如く
家あふつ未まの空の月の
はら子さをふくむたぐや店の月
海山を覚えそほの月見の如
信りの市ゆき

露時雨

升買うそふ別りの月見の如く
袖はまらうそふ別りの月見の如く
母の白髪をねむる

秋霜

乙おう秋ゆくゆく帰る月見の如く
の松をねむる

落水

老の眼りそそく小貝や林の如く
但利伽羅や三交をねむる水

菊

延宝年中の吟

笈記三画賛トアリ

重陽
重の下り菊や栲木を
秋をねむる
蓮池のまふ菊をひきまをねむる
のふ龍山の菊をひきまをねむる
重陽の菊をひきまをねむる
大の菊をひきまをねむる
雅うま菊の如く重陽

辛酉ト誤り来レリ祭酉
ナリ依テ改ム

元禄五年丙初冬九日奉書奉園
之遊

重詢の言を辨せし日の事ありしや
幸休るるに其は花の事ありしや
やうき書を并時別重詢とて
心より其展重詢のたりし事
ありしやありしに於て書を辨せし
人々をきくべしとて書きたる事ありし
事の事や庭にきれたる後の事
望田の所へ本既書師の兄に
書しお招きし事ありしや書をた
る海をきく事ありしや書をた

イニ破お野トアリ

前章ノ初案ヤ

孫の中葉書の軽の芳しき
蝶も亦く破を吸きくの軽の好
葉を後

九月九日乞おつし抄を撰り
事あり

子のややとてさうくは葉のほ
んぶのあをや書かしのやの葉
空水ありあり

新書もや葉の事ありしや
ハ所ありあり
そのの事ありしや石の事あり

大門通をさくらり

碧の箱や古き店の曙戸の葉

翁

田家うやむ

橘あまの枝もめをさくらりの花

素ははな

花のよきやあはれふらき併連

そこのり味あ

葉のよきうそこのりのなる言句哉

生玉をよよりりをさくらり

葉うさくらりあはれふらき併連

左折字あ

そやうきあ九日ゆらりの葉

草履の雨

起あつる葉あつるのぬり水のあ

山海の磯つをさくらりあはれふらき併連

浦の磯のそあはれふらき併連

そあはれふらき併連

ひあはれふらき併連

うらなをさくらりあはれふらき併連

桜海うらなをさくらりあはれふらき併連

葉の枝あはれふらき併連

山中やまうらなをさくらりあはれふらき併連

本因

泊船ニ事良ハ貴代ノ男ナリトアリト此吟ハ初葉ナラシ

山中集 先後手集手抄
ニ作ル

陰家や月をまきくさる田之反

如り事

庭ありのしりりおきき草の香うぬ
きくの庭庭庭庭庭庭庭庭庭庭

園女そのりめ

白茶の目ふ立ち見え草の好し

物の下紫法をきり高の 葉 其角

柚の色や秋あつたる草の庭

葉の海葡萄ののふふふふふふ

高字の垣をたふさくやこのふ

土岩の子きハハハハハハハハハハ

庭のまきや花よりあまなるふふふ

茶苑

葉を切るあまのまきくさるのり
白き一地す庭ふ葉を先折ん

其一九日

葉におのほゆつたる九日の形 嵐雪

其二素雪をき

陰家やよめ葉の中ふまきくさる

其三る葉を掃く

黄葉をきくさるのまきくさるのり

其四名石

白きくの庭倉や垣をきくさる

其五

茶九章

野菊

山根のまきもみり

志賀郡四ノ〜ありし被コや葉の香

名前の様多あり

葉のまきもみりねをみればや漢のま

園女争争を老師のふり

中中出出るるつついいるる

秋の光光照照るるたたりり葉の香香のの水

能能味味あり

此切のふみもみり葉の香

借借のの香香〜産の信信ややままのの葉

三宮川三宮川のの石石〜河河送送ききるる

まきもみりねの香香のの水水

産寧坂産寧坂〜

葉の香香をみれば〜ありり

水水清清〜まきもみり葉の香

台台根

杉の上杉の上〜まきもみり村紅葉

大山

腰押腰押や〜る岩根の下下〜

三条橋上

片片狭狭多多都都〜ののまきもみり

阿阿〜人の人の信信あり

まきもみりねの香香のの水水

山

菊紅葉

紅葉

梅紅葉

そぼろしおきよし〜ありきよしのひ

戸城山荘

むしお紫花の言をきたく白うれ

狐林

牛すきり茶屋をのくまお紫花 風雪

標草う原

林ありし煮焼する日をたすあめ

莊子標木の大きき牛をのくま

お紫の歌き免をい〜このや

はきれきん〜放翁逍遙のなを

むし事〜あり ちりけりし二季の情や梅お紫

梅紅葉

櫻紅葉

未枯

南天実

栗

芽まより二葉あり茶を梅の候
〜おまうすきれ〜ありのあけ
あやらきん〜の落研合より
ちみわら〜

形をちる梅のお紫を舞下りのね 乙未

早頃のほきを梅のをきちうれ 乙未

う〜梅やまの餅さふらけりし 乙未

南天や梅をのくま 小倉山 乙未

ぬ是栗のまらりき 乙未

二子山二子むらもん栗の〜 乙未

清而れ〜 乙未

生栗をきり〜つめたる山梅のれ 乙未

練くくく袖あまの粗の糸をひけ
練粟やまうさうけたる法の端
幻住庵よりまき由志東の
ふくろく

菊福く栞くうきまの毫
は世を翠亭

里より神の末をたぬまおし
嘆遠遊吟

清澄や清神まを我まら
大和路の女う物いひ

泊瀬女く栞の深き志のひり
ひり旅深神くく頼る作
嵐堂

詞書略

於そく清栞まぬる翁くゆ
落栞舎感候

栞ぬくや栞まらぬの如くし
栞らりや名をぬぬなる出葉堂

古崎小く交考くく遠く糸の
すきく糸く糸

息才のぬくく糸く糸の栞
糸のぬくく糸く糸の栞

糸栞や隣子ふく糸く糸の
糸栞糸を糸を糸

清栞くく糸の如く糸よ明屋後

木實

泊船句撰終ありしニ誤

木實の宮無出る熟柿の如
慈水別荘

下辛

籬りたる木の葉子の実拾えや

後の実ある孫をの相言や新あり

未だの掬らき母の人の玉産うけ

橙や伊勢の白子孫名とし

望田表流の休言

祖父の親りの子孫庭や増えん

秋のうを井子の柱のかくそらん

舟修のうをお産孫をくせき

う人丸の柿の實山の子達の栗

のうを中の子をのあまうねり

茨ひ果

榎のうを一葉の山新木の實を

蕨澱和あふ実を

そはおや新あろをう玉たき

信濃信馬楽

あまの光粉をん信濃のあま実物

讀甲陽軍鑑

あま実麦の信濃の武士はあや

半段の新をうああるあま

神田祭

あま実大名をまはりうめ

地言ハりまをまはりうめ

蕎麥

神田祭

嵐重

角

嵐重

去来

文字

嵐重

御遷宮

行秋

暮秋

天和吟なり

遷宮をねむりて

そまゝの塔抄 ありぬる遷宮

大工達の名なき秋や神の秋

行秋や方ふ引まゝ三布蒲団

蛤の中へ居るものれゆく秋

り秋路程なるや青きものん

ゆく秋や多きひら布たる粟の球

りあまや栲ふらゝる 絶 屑

り秋の四五りあるものれゆく

懷老杜

風聲を吹く暮秋歎きぬ 誰うき

清水の茶店小おふ

秋風の斬をゆくゆく 林とれぬ

赤壁のやまをゆく 出ぬ ことなれ

そくゆく風とよきをゆく 世もさ

く 藤ふら

秋政の月見とまらや九月終

九月廿七日の月を惜

見 月やたのしみをゆく 九月終

慈潤雜

似城の小唄をゆく 九月終

杉の竹葉軒と云庵をゆく

栗科小唄をゆく 十月の庵

九月盡

秋雜

秋の日ニとり くらあま

深川の庵を括るる

秋十を却て江戸を去るる在郷

菘崎神あり

赤の杉林実生寺代や神の林

見わたる大沼其れは深瀬の林

ありてやし田面の新や里の林

種のはな

さびしき深瀬小橋を渡りて

小名木深瀬相実寺あり

秋もさうさびしきや赤い小松川

庵うらんとて句をさうおせける

魚好の伝へ

三浦の秋あり

更級吟行句あり

林のふゆのさびしきとてさうりて

あきしき秋遊ふりてさうりて

寂きとて人さうりてさうりて

新秋のさびしき

秋のさびしき林の新橋やさうりて

林のさびしきの中り風のさびしき

留別

さびしきとて秋遊ふりてさうりて

秋遊ふりて秋遊ふりてさうりて

秋遊ふりて秋遊ふりてさうりて

秋遊ふりて秋遊ふりてさうりて

秋遊ふりて秋遊ふりてさうりて

小文庫ニカクアリ三州藩ニ
秋風や相々動くト再案ア
リト云

梧桐の葉は秋のさびしきや昔の
葉

梧桐

木の葉を何ぞもよほさるる葉は

昔の葉

秋風の聲は隣りの木をささるる人

同言 風聲の遠なる人

舟の楫や赤き舟の舟の神は山

小舟女や舟の舟の舟の舟の舟

中村少長左衛門 舟の舟の上

舟の時

舟の舟の人を舟の舟の舟の舟

舟の時

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の時

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の時

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の時

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の時

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟

白髪やトアリ

次磨

海のあふ木のある寺と舟
洞窟の林をある山の麓

神無月

冬之部

玉津島あり

清留寺なる中地あり神無月 其角
神皇自承りて其地先皇を

木名墳あり

船多ふ又法をて神無月 其角

新自のそむ武江あり

都也神の極森の日記あり 其角

神の極海あり其地其角

布子其地あり其地其角

神旅

神送

神留守

冬空

小春

玄猪

初時雨

前書ハ梅ノ枝ノ謡ノ
文ナリ

あまのつゆあきく神の宿まは 下五十五

大黒の蟹

神の留守くく女房をさるく 嵐重

我あくるりるうらるあり冬の中 霜

霜遊伴

ゆりまきく小春の海も暮のあ 文子

とり月のをくまきわく玄猪く 玄角

人の話へくめてけり

まくく世初のをを我時るく 霜

まやあゆくくくいふあぢのむく

の言あうきくくくく袖くく

くまきくやまうめやか極人

極人く我名よき極人初くく

浮賀の山中

初まき極人小春を何くあり

浮六亭みき

あまのつゆあきく小春を初く

あまのつゆあきく初まき初く

國くの暮あきく同く オロンカ

あまのつゆあきく三年の暮あきく

あまのつゆあきく三年の暮あきく

あまのつゆあきく三年の暮あきく

あまのつゆあきく三年の暮あきく

あまのつゆあきく三年の暮あきく

のつゝめ初はあはれに結ぶる燈籠の
 びりり紋をく痛める光ををひき
 くのま向ふふふあつたあつた
 ちのま川の小石をまのあつた
 世経のあ品をま—空菩提を
 いのりま恩を謝んまをねへり珠
 ふのまのまの—の—神とく心妻の
 限りままをまのちまをまの
 曇子のあまのまをの
 石經のまをまの—の—
 雷落—初まの—初時雨
 戸田燈大ま

時雨 延宝中ノ吟

天和ノ吟

初—まの—降—小石川
 是の—の—
 雲の—我を—
 相禁—志清—
 以海—子鞋—
 子鞋—の—
 志清—舟の—
 初—の—
 一尾—の—
 美濃—の—
 美濃—の—

散句集子鞋をトアウ

句撰一尾船ニ誤ル

続猿蓑ニ寄りてトアリ
誤リカ諸集宿りてニ作

仰り木の庭をいさめる〜〜〜
下平七

春里の草を〜

志々々や田のあ〜構の思出を〜

崎田跡塚を〜家〜

高〜〜〜名を〜〜〜時自〜

高〜〜〜知〜〜〜大井川

新葺きの出〜〜〜時自〜

山城へ井出の智〜〜〜

高の石和家〜〜〜時自

人〜〜〜これよ高〜〜〜

あき〜〜〜これ高〜〜〜

神傳の〜〜〜時自〜

よ〜〜〜名た〜〜〜

志〜〜〜やありし厨の〜〜

地〜〜〜ろま〜〜〜これ

古おめ〜〜〜

此〜〜〜時自〜

高病床

此井より〜〜〜時自〜

芭蕉翁之回

志〜〜〜や〜〜〜

出平寺奥の境

小ね〜〜〜れ〜〜〜

此寺寺〜〜〜西〜〜

夢中ノ作ノ下雜漢集ニ委シ

見中り了

三尺の力を西海のししれうめ
相原の遠るを見よるまをそそ

遊香園寺

八尋の樺の板石をそそりし
松風の里の相よるししれうめ
茶を煮るやまをれあまのふゆふん
海苔やまをる時節のきもぬし
いそりし如沖のししれの美帷は帆
去来抄ニ至竹石居帆ふりけり
しそ下ト再案ノヨシ云リ

臨川寺

木くししの地ふり落きぬ時節に
ふらふらねねお袖を吹くしし
雲よりの先ぬあまのししれうめ
山麓のけしきまをるししれうめ

高田原義仲寺

夢うけしそそぬ袖のきをそそ
海苔のししれうめあまのししれうめ
古時うけしきまをるししれうめ
牛羹了佃父のそそるまをそそ
一方のあまのそそふししれうめ
雲をそそりし沖の時節のししれうめ
舞入るまをるししれうめ
きの相よるまをるししれうめ
屋根葺の海を揺るししれうめ

葛松原ニ地まてり地のみる
一布ナリト云

錫をふりくくけの中をくくき 女

風をわきまをくくくくく 女

海山の志をくくくくく 女

城中国富塚を向

乃月やりのくくくくく 女

所思

をくくくくく 女

月代やりのくくくくく 女

並名中途のくくくくく 女

をくくくくく 女

徒つりたるくくくくく 女

望り望へたるくくくくく 女

女の園くくくくく 女

とくくくくく 女

相向あつしのくくくくく 女

竹の畫巻

くくくくく 女

木枯やりのくくくくく 女

三河新塚のくくくくく 女

系り傳へたるくくくくく 女

風来寺のくくくくく 女

あつしお岩のくくくくく 女

又のくくく 女

木くくくくく 女

木枯

狂の二字後年云
除捨玉下ト云

井波門主極心院版

あしきくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

木よりしや沖より空を仰ぐ山は雪の
其角

芭蕉翁回覧
嵐雪

柳のふきたけりうへりさきくくくくくくく
嵐雪

木枯り梢の櫛のあぶりうらみ
く

あ川うらみ

あしきくくくくくくくくくくくくくくくくくく
く

義仲寺史四七日懸る翁之物

本よりしの猿も深き深き若くしき
く

賀藤波山撰集

木よりしや剣をふるふとまふく山
去来

翁病中行禱の句

あしきくくくくくくくくくくくくくくくくくく
く

木枯のあたりとあふやらふ柳
去来

幸良の玄梅蕉翁のあしきの

あしきくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あしきくくくくくくくくくくくくくくくくくく

漢字くくくくくくくく

柳のふきをねらふらくくくくくくくくくく
く

何となくを杖端をまきうれり
去来

は木戸や鉄のさきくくくくくくくくくく
く

あしきくくくくくくくくくくくくくくくくくく
去来

冬夜
冬月

寒

雪よりも白く 必髪小冬の力 文子

池下の茶店あり

松葉を焚き手拭ある室は 翁

城人と吉田の孫あり

さむききくあり 松葉を焚きたるのま

元朝和尚より海をたまり

ちりくあり 小ぢりたる

水さくく麻入りのちたる踏うり

糸子や煮くりの口のけきき

塩鯛の旨ききむきむ 魚の店

仙化く父の遊美

袖のけりよらぬく 濃麗

留墨 洗ひたるトアリ
句集 洗ひたるニ作ル

葱白く洗ひたるく 何くあてのき牛島小島

一 一 一

一夜寝く室さくく人ん子の産

使者くく書院へ通る室さく

大和めくく 一 一

多取の城の室さくく 山

山の産のぬる産く月産

坂川を産りて

月産くくあり向く 産く

懐おき

室さくくおきく 山のく

下生

牙

冬籠

炭俵少文庫続五論真蹟集ニ
右まよトアリ笈日記ニ金屏ゆ
トアリ三州紙ニまよトアリ

為の病床中待りて

うらまゝある業能下ニトの室をうら

神杉の海をむけや新雪の夢

ふゆらなりあるまゝはんまの柱

雪屏の杉枝 古きまゝをこたり

贈 酒堂

湖水の磯をまゝに中なる田舎一丈

草ののちのたままゝをねえをり

半あつてふゆらまゝをこたり

難波津や田舎のふゆらまゝを籠

控七うらまゝ

春里をまゝにまゝをこたり

舟をまゝにまゝにまゝをこたり

うらまゝのたあふれをこたり

ゆきをまゝにまゝにまゝをこたり

ゆきをまゝにまゝにまゝをこたり

ゆきをまゝにまゝにまゝをこたり

ゆきをまゝにまゝにまゝをこたり

ゆきをまゝにまゝにまゝをこたり

ゆきをまゝにまゝにまゝをこたり

ゆきをまゝにまゝにまゝをこたり

ゆきをまゝにまゝにまゝをこたり

子川をまゝにまゝに

おろふ伊勢をまゝにまゝをこたり

幻住庵

雑賦の名々後抄ハ冬あきり 冬角

新巻

嵐の形は水まん冬とて里 冬角

舟も舟も舟物の舟も冬 冬角

箱庭

白粥のあきりまきまき冬あきり 冬角

墨漬り肩の毛冬冬あきり 冬角

冬角

鏡のうら問も家も冬あきり 冬角

霧のうら冬は冬冬冬あきり 冬角

山も山も冬も冬冬冬あきり 冬角

冬構

冬雨

初霜

初霜のうら冬あきり冬あきり 冬角

初霜のうら冬あきり冬あきり 冬角

冬角

初霜のうら冬あきり冬あきり 冬角

初霜のうら冬あきり冬あきり 冬角

初霜のうら冬あきり冬あきり 冬角

冬角

初霜のうら冬あきり冬あきり 冬角

初霜のうら冬あきり冬あきり 冬角

初霜のうら冬あきり冬あきり 冬角

冬角

初霜のうら冬あきり冬あきり 冬角

霜

夜まきり初霜

初霜

初霜

夜日記ニ送るニ誤ル
治船書の名ニ誤ル

葛の紫蘇表んをとり申すの書 巻

病中

葉のむきくすの志もの枯くの水

深川右様來時

右のくやいさひを踏踏のしる

湯子生り妻のまをみどりの料

をい送るきやれ

火を焼くあふひい居居のやお湯ん

揚おちち申す一信のまおあり

上平の葉をを併けりまふ

をい送るきやれ

をい送るきやれ

栗飯の焦りて白くや家のり 角

ゆきき女を焚りし

家の焼くしんは様をまふ

山行

山をさるの奥山ををぬる水

お納めあしやけををぬる水 嵐雪

お子の行より家のまをぬる水

あつををぬる水

ゆきき女を焚りし

あつををぬる水

お納めあしやけををぬる水 去来

お納め

るそや 庵をそぬをそぬの家招

本号家の倉庫も保るる

新築や 茶屋の後能くきり 福 大子

芹焼中もきり漏の田井の初水 翁

海川を夜装

橋の初法を打て初水も夜中後

茅舎買水

氷若く 偃るる咽をうらむる

初社園紀行

そくそくやまるとり 氷も新法師

危巖も男の心をいふ山家集

の類へいふ

初水 笈日記 漏痛ト云
誤りカ

氷 真蹟ニ櫓の初水腸
氷も夜中トモアリ
天和年間ト云ナリ

同上

笈小文ニある初水ト云
冬の日ヤトアリ

続猿蓑ヲ初ノ趙南の心ニ作
ルハ書損ナリ

霰

芭蕉談ニ云然キト
まうりカトアリ

一室もあをぬ雪の氷うらむ

廣深

池の白雲のあをぬや 雪岩山 去来

まじりまの初ぬ雪を降るる氷 大子

いそぎけりありありん玉阿る色 翁

石山の石をなるとるあをぬ氷

自画自賛

いそぎききや 阿る雪の松並

雪おの雪を人へ送るる時

霞をそぬあらの氷魚を煮るる出雲

よ或人文

後珠集ニ琵琶行の写アリ
有殘海ニ雜吹の句出再
案ナルハシ

続猿蓑ニ嵐ハトシテ里
浦ノ浪リ玉フニヤ

冬〜うぬ宿や相〜る音あ〜る

ぬり〜る

琴琵琶のねれ〜弦の押〜る

雜吹〜琵琶吹〜折のあ〜る

再色意座を造〜る

あ〜る仲やは〜るの古福

い〜る立〜る引〜るあ〜る

海〜降あ〜るや〜るの音

〜の〜る木〜るの〜る

あ〜る〜るの〜るの〜る

武士の〜る〜るの〜る

〜る〜るの〜るの〜る

老武士〜る指や〜る

招移〜る〜るの〜る

飛〜る〜るの〜るの〜る

雲〜る〜るの〜るの〜る

志〜る〜るの〜るの〜る

志子の〜るの〜るの〜る

あ〜る〜るの〜るの〜る

〜る〜るの〜るの〜る

〜る〜るの〜るの〜る

〜る〜るの〜るの〜る

初雪やいつ大佛の〜る

〜る〜るの〜るの〜る

志巻

初雪

花摘ニ〜る〜るの〜る

句撰をむねと誤

初雪や雪山傍り 笈のわら 一 菊

深川大橋のりくもる時

まの雪や掛のりたる 橋の上 一

初雪や水仙の葉のたをむもる 一

立総細

まの雪やゆりきさうふく 雁 一 其角

初雪や赤子くく 足さる 船中 一

はら雪や在り 杖持のふく 笠 一

柿の細壺四百ふ一 智のや

翁客 唇をうらむ 和さふ

初雪やゆりきさうふく 大細壺 一

まの雪やゆりきさうふく 人き 細壺 一

市中 深

初雪や門より 橋ある夕 雪これ 一

西運寺 具水

初雪より 人目のやまの 伏見 舟 一

ゆりきさうふく 降す 垣根 舟 一

松名 舟

初雪や四五里へ 去る 水良 舟 一 其来

雪の竹 笛はる へら 舟 舟 一

雪の朝 びりり 于 鮭を 樽 舟 一

子ふおれ 舟 舟 舟 舟 舟

志向を 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

続猿蓑二稿ありトアリ五元
集二稿ありトアリ

雪

延宝中ノ句ナリ

延宝九年東月記三富家喰
肥肉丈夫喫菜根予多下
ト初書アリ

同時代ノ作ナリ

同上

熱田河修夜

磨を日向を鏡の清く雪の是 霜

信濃の夜をさるる

雪ちるや積雪の落の川能う

地の方の雅人とてん世ふさくさ

らそと老の後志願の里ふく

を侍りしゆりし大伴おそあ

里智月といふ老后の侍りおそ

新るゆりなき語出さるは心て

おそくちるそへ

少将の居のそゆりや志願の雪

湖水眺望

此良の上雪さく日長を積りの橋

大雪や波あつひり信濃の家

日頃少むお終の雪のあ

旅人を思ふ

るをさる人さるの雪の何さゆ

子産り士あり

木枕のあやう拭みやよりの雪

湖水のそ志願りたり此良の雪

産りうりり

涼川や根りの芭蕉雪のそ

抱月亭

市人うりりそうん雪の雪

野まらり一紀行春の日ニ出
日頃少むお終の再業ナラン

甲子紀行三市人とてはまら
う雪の中トアリ初業ニヤ

杜園亭より中あまの人の
子ありそつとけいそ

雪のゆきさらけ師走のゆき
第根まき人あまのしとけの雪

小町の雪鏡

雪のゆきさらけゆきゆき

雪の山月夜鏡

雪のゆきさらけゆきゆき

閑居蔵あり

海のゆきさらけ雪のゆき

雪のゆきさらけ雪のゆき

雪のゆきさらけ雪のゆき

山中ゆきさらけ雪のゆき

雪のゆきさらけ雪のゆき

竹の鏡

雪のゆきさらけ雪のゆき

雪の山

雪のゆきさらけ雪のゆき

雪のゆきさらけ雪のゆき

雪のゆきさらけ雪のゆき

雪のゆきさらけ雪のゆき

雪のゆきさらけ雪のゆき

雪のゆきさらけ雪のゆき

雪のゆきさらけ雪のゆき

三州紙三つ雪三つ泊船
句撰雪の中下下書損
カ

る可くふたれまひなり雪の雪

雪山の後

鹿島紀行ニつとてかたり

寐る思ふ門の雪をくもふ哉
我雪を思ふに静し雪のうへ
杉の雪若くははらうの雪のりなり
湯徳屋へ行く急仏あり板の雪
雪の中を先ゆくは雪の波山
明皇の雪を先ゆくは雪のうへ
嵐雪

今の路向を助ふ門は見えぬ雪
飯沼の雪も跡をふく雪の雪
門の雪を思ふ雪の雪の雪の雪
竹の雪を思ふ雪の雪の雪の雪

鏡も雪よ本鬼も雪の雪の雪
雪の中を雪を思ふ雪の雪の雪
湯屋の雪を思ふ雪の雪の雪
雪あり雪の雪の雪の雪の雪

雪集地のうら雪を思ふ雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪

雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪
雪の雪の雪の雪の雪の雪の雪

イ炭ニ誤ル

雪見

延宝天和申句
十

句撰降ふりニ誤ル
曠野小文ニいそひんトアリ
小文庫ニいそひんト下再案
十ニ

雪をふりぬるをきく轉りぬ
夜をハキリ
是てみ雪をふりぬる
去來のよひをききぬる
城人うゆりぬる

文子

三人見し雪のふりぬるをきく
いそひぬる雪をふりぬる

矮屋

意趣のうぬ世をきく雪をふりぬる
地をふりぬる雪をふりぬる
雪をふりぬる雪をふりぬる
雪をふりぬる雪をふりぬる
雪をふりぬる雪をふりぬる
雪をふりぬる雪をふりぬる
雪をふりぬる雪をふりぬる
雪をふりぬる雪をふりぬる

文子

雪丸

後日記ニ云々
トアリ

素朴なるゆきをふりぬる雪をきく
夜にふりぬる雪をきく
好む人ふりぬる雪をきく
ある夜をふりぬる雪をきく
君火をふりぬる雪をきく

十月廿五日共挑隣出武江而暨

義仲寺望芭蕉翁之墓歎唱

上略

霜月七日のゆきをふりぬる雪をきく
仲寺の家上りゆきをふりぬる雪をきく
華家ゆきをふりぬる雪をきく
心鏡一巻をふりぬる雪をきく

うたはるは師あのをさうおのり

うらうらき利一他を利一

終る其神不獨今も人

今も中終へ

あの下うらく福あましん雪あけ

ひらうきうらや雪あけの豊崎テシマコサ

あまの雪の岩をぬきや雪あけの根

まて人の中あまうさうふを理り

若の雪をさより海をや雪の海

冬川や冬川の雪をさより雪の雪

炉開

冬川

冬海

冬野

雪吹

雪仏

炉開 三年成徳の困ふの

冬川 雪をさより海をや雪の海

冬海 雪をさより海をや雪の海

冬野 雪をさより海をや雪の海

雪吹 雪をさより海をや雪の海

雪仏 雪をさより海をや雪の海

三口切ニ誤ル

炉開 三年成徳の困ふの

冬川 雪をさより海をや雪の海

冬海 雪をさより海をや雪の海

冬野 雪をさより海をや雪の海

雪吹 雪をさより海をや雪の海

雪仏 雪をさより海をや雪の海

口切

偏亡師終焉

口切 雪をさより海をや雪の海

十夜 雪をさより海をや雪の海

御命講 雪をさより海をや雪の海

夷講 雪をさより海をや雪の海

夷講

夷講 雪をさより海をや雪の海

糸屋十右衛門表中

暖峰山や 都を海のこゑに響かす 其角

約うらまゝおふちり帯り矣 傳 玄来

小畑家や 多習ふ人の居をくわ 翁

ふまゝくわの能備島く 表の翁

滑 炭う薪もるまゝく 小畑の翁

炭焼の知りくま ありん 竈のまゝハ 其角

ありん 炭もるまゝの木の焚くを 響り帯り

まゝく 層ふい年 ありん 木の焚く

炭竈や 環の入り 焚かぬ 玄来

揚の火ふ 親子 足まは 佳寐う 玄来

揚の火や 焼くく 五六尺 玄来

夕年をりし ありん 夕年を

埋火のまゝ 中 夜の高る 好く 翁

曲草松館

埋火中 壘もる 表のこゑに 響りし

埋火や 土釜もる ありん 焼 其角

埋りく 土釜もる ありん 焼く 翁

埋りく 土釜のありん や 響りし

埋りく 土釜のありん 埋火の 表

埋りく 土釜のありん 埋火の 表

埋りく 土釜のありん 埋火の 表

埋りく 土釜のありん 埋火の 表

埋りく 土釜のありん 埋火の 表

炭

延室中ノ吟ナリ

同上

捐

埋火

火燧

ゆき

大體のうきを礎とすを指し奉り

其角

深若世楽無事ニ慕心

つめくし新也あきぬ火煙うれ

嵐雪

持病うききりやちり

看病もひりりあまき火煙うれ

玄米

古板中や火煙まきく函内の新

、

多産の火煙の下や

右 狸 女 学

下京を山りや火煙折り折る如

、

あらしと旭とあむらうらうれ

、

さるる火煙を産の布きり如

、

吹あらし嵐と雪のふりや

り候の森とあきしきり

火煙

山和抄をよ紙状の中紙並火煙

、

火煙の賢

雑名やきぬ箱の丸紙中

箱

深川の夏の中

米買り雪の袋やあけ紙中

、

紙巾をく紙さく紙や紙を紙

、

紙つちきり雪見おまうる紙衣

、

長途短信

紙衣きり海を渡りあり大井川

其角

かきり安のふつとひきり

頭巾

紙衣

絶つて紙衣をいそぐ嘆喟の冬
わづせし一息の重荷や紙子ねる
おねさふ猫も紙子のゆきをくつね
史学

真交

交りたる紙衣の切を懐り争利
紙子着るをそふ火籠のまじり衣
片麻走らうらぬをのちをそ
立ち立つる言の紙をいそぐ
おまひる

借中より紙子の宮や墨土産

極月十日西竹大坂(のち)

いづつや足袋をきく色うつりの山
其角

足袋

草鞋袋の四十は足をもろく込ぬ
足袋も知る藤もね痛く女為り

畫漢

ちのむらよと藤酒をきぬ紙衣
其角

延喜帝

冬夜は國土の民ももろく空うん
くねの野もあつて御衣をぬぐせ
紙はきもろくぬり

脱衣も山御衣をき天下の象うぬ
其角

孝下うあの子

うのきもろく蒲巻下をきねや海き
其角
寝ぬ紙衣は徳もろくのまめぬ肉
其角

余

濱より二紙書く句ト
り画質ニヤイカ

蒲團

系あり

蒲室より持てる安やわりの山 嵐堂

先師十二回忌

志願の蒲室よりある本魚池 菊

あつこうみの出よりある公桶の風

古き代をしのびて

家の後孫子供する公桶のあり

朝波老父七十賀より

白川の浪きりともや相火桶 其角

源多や是も海字火をちり 菊

耕堂字子望より

はつしふ白ひやのちり一より是

復花

火鉢

火桶

こりるをきりしめりん出より如重 其角

祖の御代百取進福

十月をきりしめりん出より如重 嵐堂

月の海に吹くとも竹無寺の松の

心を渡りて

きりる波や海よりあるきりる 菊

鳥寺の平回り地をうりて

より既する年よ及びふりて

堂をわのありしめりん出より

出石亮よりきりるふりて

ありて縁縁のありて

百歳のちりしめりん出より

散紅葉

落葉

と夕夜の燈現をさす

言人よ我名をちりしきるは紫川

篇

舟待のひまうちありきりしきり

大子

賽紗をきりしきりしきりしきり

去来

篇七回忌追福の付法善經新

字詞書

行くきりしきりしきりしきりしきり

去来

大津少

三尺のゆゑあしの木のきりしきり

篇

九とやのきりしきりしきりしきり

五とやのきりしきりしきりしきり

あは古来名利の地をさす

木葉

重なるきりしきりしきりしきり

常人のきりしきりしきりしきり

舟のとやしきりしきりしきり

舟のゆゑあし木のきりしきり

初任産

舟のゆゑあし木のきりしきり

去来

十月十二日辞世

一葉ちりしきりしきりしきり

去来

舟七とや

舟をきりしきりしきりしきり

去来

水産のきりしきりしきりしきり

去来

舟七とやしきりしきりしきり

去来

冬木立

このむらさきの井の紅まやを本立 玉角

栞求老人のま向

山茶花

霜菊

寒菊

幸来屋茶二留の
傍より

山茶花 霜菊

霜菊 山茶花

山茶花 霜菊

霜菊 山茶花

先河初月忌

山茶花 霜菊

紫名本尚寺より

霜菊 山茶花

牡丹梅人言う茶室裏の園を地

まひよせり

冬牡丹

冬牡丹 山茶花

水仙

水仙 山茶花

水仙の白き花子のよらうり

一 桃先樹後の石をあらへり

水仙 山茶花

水仙 山茶花

大町新宅

水仙 山茶花

水仙 山茶花

色杜園二句のらち

水仙 山茶花

水仙 山茶花

水仙 山茶花

冬枯

冬枯 山茶花

麦時

麦時 山茶花

蕎麥刈

蕎麥刈 山茶花

菊を足送り

菊を足送り 菊を足送り 菊を足送り

大井里

大井里 大井里 大井里

難波病中

難波病中 難波病中 難波病中

振う病中 振う病中 振う病中

三村を經る 三村を經る 三村を經る

歸るを 歸るを 歸るを

舟り 舟り 舟り

舟り 舟り 舟り

是處菊翁 是處菊翁 是處菊翁

枯野

菊一廿以ノ後

枯尾花

菊一廿以ノ後 菊一廿以ノ後 菊一廿以ノ後

熱田

熱田 熱田 熱田

菊翁の後 菊翁の後 菊翁の後

菊翁の後 菊翁の後 菊翁の後

夕照 夕照 夕照

滑石

滑石 滑石 滑石

葉の後 葉の後 葉の後

滑石

滑石 滑石 滑石

大根引

大根引 大根引 大根引

枯蕙

甲子紀行ニ發田、
井類破セシ文アリ

枯草

大根

陸奥衛示坊主
乗せて下り

冬菜

芥菜

莖漬

蕪

雪丸ニ反り下り

新嘉り小切を京や大根引

玄席子抱鉢を菜根を解

了終日大まうり證信也

そのふの大根をききいそり引

山椒場うるゆめより大根引

たよりし引人のあり忘大根

きし種を種りの友やき菜賣

玄衣をせりしをさき下り芥菜より

おのり衣をききいそり

君見よや赤子入るる夢の柳

其汁や赤のふりしりり又

編みめハ 松風の里 喉痛く相約

下全

千鳥

さうしん寺の雪の降日

星崎の園をさうしんや赤子寄

つひまのそひるはあし川あり

ふれりおふ月のききやむし樹

村をききおねいそり 赤子好

妹よりきき嵐の是ういねあり

城後居の義塾をさうしん赤子寄

あつろきや答ふゆりし浦あり

あつれやきり 赤子寄

赤子寄のふれふのゆるきるの如

心赤子寄中絶の舟屋取

備亡師終焉

箱

其角

玄衣

赤子

其角

其角

鴨

句集二十五年ニ誤

鴨の暮もゆきゆき子も暮
尾張の國熱田うきうき
人々師走の海人んとて毎
出

翁

海を渡る鴨の暮るるふゆ
鴨毛のほろほろぬきぬきの足
鈴鴨の暮るる後る有る
薄う河を伝やう流の如
鴨なりて水も歩む如く
この鴨もよきをよみて十餘年
夜終るる年一とて鴨のむき
最後の暮見しと鴨のむき

去来
太字

鴛

句集ニ鴨のきよむ誤

都鳥

鷹

水底を渡る鳥の影の山鴨
翁病中行禱

破あま鴨のよきありや
十石を登るうきあり
系ぬる人々一葉内

牛角

鳥帽子着る毎羽の鳥
杜園を訪るる鳥

鷹のむきゆきゆきゆき
杜園ふふ葉を何は古
鳥のむきゆきゆきゆき

翁

鳥のむきゆきゆきゆき
鳥のむきゆきゆきゆき
鳥のむきゆきゆきゆき
鳥のむきゆきゆきゆき

牛角

木兔
綱代

河豚

延宝三百韻ニあり
何れもあやとり句
撰まのりト誤ル

下全三

鷹の眼のこを舟より見る程哉
 みるくの路中の人小絶さるる
 鯉をわつ細代の木のまをひく
 あらま方根ぬまをさるるあり
 静きを殊ぬおをさるる細代也
 あら何れもふまのふさるる汁
 河豚汁や鯛もあまのふまを別
 あらあま古きぬ像あり亭
 こころ堂のをしへを守る
 足牙のまをさるるおやまを汁
 末名うたて熟田う到る
 あまはまぬ河豚つり魚七里と

文學
 其角
 大守
 箱

河豚あま水のみよりや下河豚
 吹井の浦うちめりり
 ちんちんちんちんあまはまは
 父子と親
 河豚汁や憎きぬあま程を
 手紙切つてあまはま河豚の句
 神陰
 あまぬあまふまをさるる衣
 能くありま鯉ふらりまを河豚
 父う碧所をさるる
 ちんちんちんちんあまはまは
 望人お抱つてあまはま河豚の句
 末

其角
 末

五元拾遺三つとて誤ル

鮫鯨
生海鼠

蛎

冬蠅

冬蚕

霰酒

蕒疑

下年四

鮫鯨をとりて中見せし物なり
生かすべしと云ふ事あり

海鼠はふきと云ふ事あり
海鼠はふきと云ふ事あり

尾鼠の心と云ふ事あり
尾鼠の心と云ふ事あり

蛎はふきと云ふ事あり
蛎はふきと云ふ事あり

冬蠅はふきと云ふ事あり
冬蠅はふきと云ふ事あり

冬蚕はふきと云ふ事あり
冬蚕はふきと云ふ事あり

霰酒はふきと云ふ事あり
霰酒はふきと云ふ事あり

蕒疑はふきと云ふ事あり
蕒疑はふきと云ふ事あり

白撰やと云ふ事あり
白撰やと云ふ事あり

蕒疑はふきと云ふ事あり
蕒疑はふきと云ふ事あり

白撰やと云ふ事あり
白撰やと云ふ事あり

蕒疑はふきと云ふ事あり
蕒疑はふきと云ふ事あり

納豆

冬雑

葛松原笈日記油
折り出し
下り撰中
一二虫ノ考トアリ

造水三十石トアリ

如白ふきの事ありぬ
納豆汁
生角

先師一用忌

美人の粧を
納豆
生角

三河國
納豆
生角

信の
納豆
生角

秋
納豆
生角

成
納豆
生角

冬
納豆
生角

大
納豆
生角

ひ
納豆
生角

納豆
生角

句選其方を誤ん

河内をよむるやけりありあり
世りし心ふをけり

そのころんや枯木の枝の枝
志すころんやきし可き木の夕陽白
其角

好柳の市店

人をいんそのころんやけりありあり
起ゆるやけりありあり
帆の舟ありあり
窓まや二きありあり
何れも人藤葉もくふきき

先師七回忌

兼しそむるやけりありあり
兼し

霜月

水風あつた免ふのあつた
霜葉やうらうらふり
卯七守

霜月や日あふふけり
長幼者守

袴着

袴着る娘の子ありあり
其角

貞徳翁五十年忌元禄十四年
年霜月十五日懐舊の心を述べる

帯解

帯解きしは花のつら

神樂

五元三息白き
了り様表白

夜神まや息白きありあり

あつた帯のあつたありあり

鉢敵

たせし誰強組まんし里神楽
は神楽や火を焚く所はあやのん
去来

落村舎子鉢敵を結り

去来の暮りめりるるをちりて
宿

納豆切言志けり
鉢敵

去来のふかぬり

子考たつ加茂川あきり鉢敵
其角

こころしきを感えりし鉢敵
、

夫婦有別

鉢敵は女丈夫あつるあきり
、

とありし系争の思ふ
鼠香
去来

去の古き鉢敵思ふとちりた
去来

去の去りし門のたつ鉢敵
、

鉢敵をきけりし宿の中
、

されしふかぬり
、

帯束世生の思ふ見人鉢敵
、

十鉢を結りし宿の歌をけり
、

旅人の馳走ふりし鉢敵
、

船丘の影水にさけりし
去来

一舟のふかぬりし
、

裏門のたつ鉢敵
、

月白き師走のちりし宿
宿

十二月九日一井

旅の宿より一宿の師走の夕月夜
、

師走

花摘ニ何みトアリ泊船句
撰トモニ何をそのニ作ル

寒

寒雨

寒念佛

寒聲

何よ此時去の年ふけ 物
まれりし時去の海りふつあり

ふか南春作病末

海ゆ急く病を悟る時去うれ 冬角

山伏の足もふ出さう所去うれ 冬角

可く鮮の雪也の病も空の中 霜

有雪の悪く鐵きん空の入

多きうく多相の田面や空の西

兩國橋上

曉の露波うりまや 空念佛 空角

南都ふあまうり時

空暮や南大門の水の南

早梅

句撰吸つるを記

探梅

夏の小文ニ記トアリ
夏日記家トアリ句
撰春ト冬ト雨季ニ出セルイ
カン

節季候

句撰来りて誤

は里をほむとりのありの若院の
佛門の蒼きせとまふ地あるり
よりそほりうきとらやう一人の
経巻を越わすの文をむらめ
うらまへりしとまふ時をむらめ

梅梅をわ喚ぶめんは英の里 霜

防川亭より

まを探る梅ふ花を軒端に

らちよりそ入さうれうめ梅

新の梅梅をさうりし見来りし 霜雪

昔季候の事をも風流か師去り 霜

素書多事集

昔季秋を在の筈ふ歩まう那
先のを親をやりあり昔季候
其角

竹所わりの画

昔季のや口をとまう海舟

昔季候の左の耳ふ門う那

昔季押やまう宿り言 新 霜

極露を片に宿り言 拈

旅行

す押の杉の木能るの山登り那

此肺の五葉一を難波少船一星

しを乗経る能通る押り

煤掃

以前書煤掃
文六偽作上二

句撰杉の木ニ誤

宇陀法師ニ古格子ニ誤
文庫ニ古合子トアリ

餅搗

異ニ月代ヤト誤

餅花

七中一子

是や昔の焼く焼くぬ古盒子

昔押のおのう棚つる大工う那

画賛

畑中ふ古聖志法乃やま 拈 嵐雪

獨り法師ハ中ノのまじり 拈 文子

昔押や山登りまう吹通り 拈 高

昔の心三十のふ返り 拈 高

これく餅を餅のまじり 拈 高

市富

弱法師我門ゆるを餅のれ 拈 其角

空ち花のさしふさせるよあう君 拈 高

餅屋や所々々々 餅の影 其角

画漢

をちりや嵐の目ふりしーの山

除風子の撰集を後ひ巻向よ

わんたんと思ふもやーるふとに

の葉をそくして紙巾ーたるをのこ

と人の中へそくしておろしきをそ

ふまーしーしゆはーしーしー

豆屋の一の賣や 其角

豆を打たすの中 其角

豆をさへけぬ葉をさへけぬ

此向ふ葉をさへけぬ

餅筵 豆打

羊暮

住居の目しきしゆはーしーしー
の竹をさへけぬ

月夜の一の賣や 其角

分別の産たすきしゆはーしーの葉

とねおめ二つの注連をさへけぬ

たふしーしゆはーしーしーしー

控へ松葉をさへけぬ

年々をぬきしゆはーしーしー

とくしゆはーしーしーしー

このふしゆはーしーしー

めくたす人の扱ふる人老の葉

葉をさへけぬ

たのや箱の詰り泣く　の暮
 澄人小あやねもあう年の暮
 松のいぢる甲斐あれと　の暮
 をせ銭箱をそのと　の暮
 中より今朝の志す入地のいふ
 ありぬるをさしひそつ　の暮
 人さす十巻
 星捨り後の小ふもわと　の暮
 来り喜をむのつ　の暮
 袖り同多あり
 行幸の半あ　の暮
 自海三十一

五元ニカリアリノ曠野ニ
 かせとトアルイカニヤ

子ををさす　の暮
 年中の松下見えたり　の暮
 松部屋の夕日志は　の暮
 中りもせ　又やま　の暮
 右津輝
 子親の志す　の暮
 小舟城ありふ　の暮
 猿猴の　の暮
 世を　の暮
 三倉子　の暮
 嵩麦打　の暮

とや銭座の道慈のいふこと
くしこのりあるは相の星の
一葉とくも若み一途へる子も
と母の心からをとりて

結句くもむ人仰のいふの音
中をのりの古橋の嵐もく
やうや常の園師意を息とし
えくをみせりたりあまのいふ
南島の刃を破の音たるを力の
幸よくくくくくくくく

いつぞの猫もくやうみくの音
追ふもくくくくくくくく

女
子

岡見

御仁名

年忘

空ハ陽望の日よりめく風
あきくくくくくくく

十五の妻布部 ちむ糸のく色
若見とく妹くくくくくくく
若葉の口くくくくくく
くくくくくくくくくく

嵐
重
高
来

海の浪意別尚糸極凡具行
半の針を友ふやくくくく
すく埋るも活やくく糸有未糸
都を三出くく乙おく新巻く
妻を待く

人小糸を置やくく糸をくくく

忘

十牛ノ吟ヲ附録ス
十牛ノ題四部録ニ出
所トタカリ

妙あり作法の甚の華

十及之圖

下九十四
經

牛角

尋牛
呼牛
隱牛

生昔異邦の佛鑑律師十牛の
圖一々人ヲ建悟のあひを志め
まれりそむを狂言ゆりり
牛ハ畜ラ吉妓ヲ也又及之を
阿のふハ能なるハ之復十及
の圖を畫撰し之を記しを案
世リ跡をそのハ 吾共角
等の夜ふり一原をのり内取られ
呼子より 阿を重くすもまきのぬれ
友の衣ハ襟ぬふ病まきの起りたる

貧牛
廻牛
番牛
無牛
半牛
送牛
老牛

武米おやとさうらふも此一男
小使も笑うあまの玉月うめ
即ちまきと咲か筆をこのまき市
起りぬれゆも原も子殿この如
何々那々をね瑞をまきの此たり
まあふの子子陰羅屋や霜の春
まあふさうとんのま入るま

一翁四拾集下終

<p> 舟めうろ老を舟のう深古亭 舟崎りそそふ志をそり望の處 黒くともぢりぬ月波浪戸の海 雲掃りて縹をねくくぬ州等 雨をれや雄子のをくくの築部不 うま月や甲の裏うら山抄流し 暮多ぬ男よ八幡を多れそ喜の月 古俗やをうく所をそよの月 つひそそふ若山角をそよる月 叶縁を掃りそ喜やうらあり </p>	<p> 系 公成 有若 梅通 漢首 向月 属各 文海 月坡 碩水 芥舍 </p>
---	--

廣澤やうけのこ戦く夕柳
 夜書しそ仕舞へい志くむり燈
 宵啼の吏ありよまぬ水勝りれ
 撫子や向の河くものうまふあき
 砂山や下りくまよ又燕子花
 吾ぬむや精のくくる馬の夜
 待りの揚じきうくまを朝の春
 餅をや月の流くま夜のうけ
 垣よくそ星く暇るぬ橋りれ
 一とらの音をふ小文うたうく
 花ゆ食ゆそ中よふあふ葛葉
 碓の明のまめこのまぬ物りれ

木繁
 影古
 素屋
 不角
 公成
 白勝
 松隣
 月人
 相室
 号宿
 林曹
 右乙

隣あきま葉家の新の如くこりれ
 花のまよ影あり若かりる雪
 踏出まゆりそりよま葉の影を
 心く如雪の中よま春の月
 向中ままねを影けくや座の太
 孫籠うけをりしりよ春の如
 意くねく孫をぬ影よ初るれ
 見る如くの橋よま春の海生れ
 吾法のむけりあるくくつりれ
 居るをそそ春の試よ通よそり
 初るをそ啼や影ふ珠の如
 昔あきま葉のまぬく蓮の雨

碓
 の
 影
 古
 松
 相
 号
 宿
 林
 曹
 右
 乙
 木
 繁
 影
 古
 素
 屋
 不
 角
 公
 成
 白
 勝
 松
 隣
 月
 人
 相
 室
 号
 宿
 林
 曹
 右
 乙
 木
 繁
 影
 古
 素
 屋
 不
 角
 公
 成
 白
 勝
 松
 隣
 月
 人
 相
 室
 号
 宿
 林
 曹
 右
 乙

報六也志一上望の雨申り
 有庭の雨風をゆき柿うみ
 有合の鳥や池吹風はほろり
 鳥雀や雨よあつた海は成る
 海棠のさき一入月よあつた
 重きうよかえそこのまき生輝水
 着る空花はめあつたおろり
 お庭の梅よあつたおろり
 この鳥の古巣の中よあつた
 摘めらの葉よあつたおろり
 名よあつたおろりおろり
 朝市よあつたおろり

習 辭
 有 庭
 自 然
 片 鳥
 雄 飛
 冬 丸
 夕 照
 梅 楓
 市 猿
 加 鳥
 雪 湖
 園 室

てるあまをささるあまの雲
 流るるをささるあまの雲
 影をれやささるあまの雲
 中を端よささるあまの雲
 白く影をけささるあまの雲
 ささるあまの雲ささるあまの雲
 根をささるあまの雲ささるあまの雲
 影をささるあまの雲ささるあまの雲
 紙魚のささるあまの雲ささるあまの雲
 羽のささるあまの雲ささるあまの雲
 子子をささるあまの雲ささるあまの雲

懸 雲
 埃 鳥
 清 水
 一 瓢
 北 魚
 文 頁
 志 局
 文 岸
 李 郎
 古 棠
 素 茶

物よりよ歸りおきほりてきほ
 川波も月のあはれをば分た
 廣野の廣斗は影なき柳の如
 人よふをめでしうもあり老り春
 錦つものありや未の宮州の宮
 赤部より春待影をとりり 岸
 洞をめぐりかき美しき流をうれ
 茅の塔は風やうもよき帯う如
 塔をのぞきよのふ余宮に水
 ともついで影も旅に 初 櫻
 雪の影のきくうらも如きき水
 夕晴や市は物なき 新しき

志文 左山 月夜 西塙 西 春 初 櫻 木 水 岸 山 石 庭 花 具 赤 明 六 岸 川

明のやや岸のふりては杜 橋
 秋まや秋のまきる庭の如
 起きまきの雨は白ひ 一本の宮代
 赤の家のおもを梅はけりりり
 手のまきく大おけける 桜花 葉
 存かふ餅まの籠さくまを 一 春
 花紫まきる中や けしうふ知息院
 殊々ありまきるの結る 餅まき 丸
 本のかきやあまのむ新のききめり
 鳥口まきしきさらのふ磯家うれ
 此の先能埃りもまの光りう如
 ありてはの常ちるなり 新島 蒲

志文 左山 月夜 西塙 西 春 初 櫻 木 水 岸 山 石 庭 花 具 赤 明 六 岸 川

水さく影をひくまや能田 始
 りの結をねと焚へくま後此水
 あくを能く内い奈能ふ理分りれ
 朝くの木の芽よあまの幸う水
 探先や自らもなれと花 登
 けりや雪の朝よかりぬ梅の月
 要の言能わはあまのれくあまのうま
 登の能ぬあまを思ふのうま能わ
 けりよ入く雪うあぬ花う水
 ありや雪の雪うあぬ梅の月
 傳付る子供らうわ子苗能
 四月や能の結う雪の 雨
 春曉
 東布
 竹屋
 石屋
 の新
 岩高
 井一
 井良
 月福
 土教
 丹中
 板堂

降りけしよ雪らうのうまぬ雪の山
 雨まらうりあまのうま田山
 けの子能あ能きつて能よき
 能をとりもくく雪う水
 家能のあくふ能方のうまう水
 見えうちよて能結るをうり水
 能のうの能まよかき能う水
 茶あやあまのあくの雪のうま
 鳴やあまの能を能くうま能水
 うまあまの能よけり能う水
 雪うまの能く能くけり小能水
 水仙の能能やう 能をうり
 春曉
 東布
 竹屋
 石屋
 の新
 岩高
 井一
 井良
 月福
 土教
 丹中
 板堂

考うのそ人のそめや秋の山
 うらなもぬまのそめはしゆのそめ
 夕暮りや望風よ秋はしきあはし
 故夢り叶はるるそめをばつとれり
 町あはぬ町よ集るる月えりあ
 懐きこのそあはよめぬ梅うれ
 友のそあはるるそあは伏
 あはつてあはるるそあは
 梅あはるる九月の名はうれ
 古き梅よ水をそりりり秋の色
 懐きあはるる梅うら田打水
 打きよ梅あはるるそあは
 梅あはるるそあは

初秋や 庭わたりりのきめあはる
 唯の先を石二のそあはぬそあは
 一筋の梅よつとくや 友本 立
 夕暮りや望風よ秋はしきあはし
 故夢り叶はるるそめをばつとれり
 町あはぬ町よ集るる月えりあ
 懐きこのそあはよめぬ梅うれ
 友のそあはるるそあは伏
 あはつてあはるるそあは
 梅あはるる九月の名はうれ
 古き梅よ水をそりりり秋の色
 懐きあはるる梅うら田打水
 打きよ梅あはるるそあは

季民
 梅由儀
 梅雪
 梅秋
 定雅
 梅壠
 来春
 梅雪
 月杵
 旭翁

あつたあをさつ〜秋の君さけ
 家そのくそく〜ね賃小 袖 堂陸 孝
 又結さぬつ〜や〜のある限 壁真 ねよめ
 向ら〜〜さ〜さ〜梅つ〜さ
 梅よのちよの蝶の月ねりれ 清民
 州の戸や露の美もさふ〜ね能 雲山
 六月やあよふ足りのさき夕へ 牡丹
 初雨のさよあつ〜るぬ月うれ 都吏
 美もさやた〜のさあつぬ法若の味 文起
 ねのふさ〜さ〜の〜〜〜ニケロ 一室
 斗〜〜のり〜さ〜さ〜あ正子れ 乙丸
 とも雨やよをる手 桂 肱 ちんちん 若舟

ま〜まの顔をけり〜梨のさ
 妙座〜の〜〜〜〜〜二ねが 陰丸
 娘姑中よき門の折〜うれ 幸女
 續よ〜〜〜〜〜〜〜〜〜 ぬ山
 ねのさや隣あをの冬〜うま〜 千丸
 そきねや秋延〜あるお信の考 雲海
 夕噉のさう〜つ〜ふ〜や〜蓮の上 聖括
 け〜つ〜は〜ね〜〜〜〜〜〜〜 妻美
 ち〜あ〜〜や〜〜〜〜〜〜〜〜〜 英泉
 ね〜あ〜ら〜よ〜あ〜せ〜〜ね〜は〜し〜まの月 風一
 瓦〜よ〜夕〜やの〜結〜も 九月〜う〜ぬ〜 匠人

如月や係料の青葉山菜
 立花の風つまらぬや過る
 名水や五代の宮上川
 こゝ思ふはよふあまの唐に
 菊のあめぬくおのありし
 二人の茶苗提を問ふり
 梅のまにかちくうさる
 秋にしろく夕暮持し四月
 空子福集る人あまの梅
 門杉や常よりあまの交
 青峰や西条村のまきり

柳塘 魯宅 柳眉 稻海 松雪 川澄 推象 水牛 原崎 月心 宗丘

春の秋や碑のよ人たのり
 地まのまのゆきまのつらぬ
 川音や雪のけいあまのり
 牛奥まのさ橋あまのま
 晴のりまのあぬ地廻り
 庵の戸やぬまの影さる
 蹄の田まのあけの梅の
 嶺のりまの梅枝のあま
 月入るはまのぼるる
 梅まのりまの梅まのあ
 梅のあまのりまの梅の
 春の嵐まのりまの梅の

瑠山 空翠 如也 申信 養精 梅谷 末洋 秋月 一飛 比山 布菜 圃原

唯のまぬぬちを字くく一 龍うの
 植あくやうのまぬ植よ初ぬ能ふ
 ぞもぬくうらもつまもて 残葉我
 抱ひんのかくあひくぬらふ代
 楊舟のまをま留るる 漏うぬ
 竹水のぬまよるるくくくわ
 塚木をの宮くく 柳を揚木うぬ
 東風ぬくや尾の葉うの氷撰く
 木重をまぬるあくありまのぬ
 石手橋を踏うかくくく松餅
 雪水のまくくくく 彼うぬ
 落葉くくくくくく 揚うぬ

龍 非
 一 漢
 新 朔
 傳 睡
 條 人
 一 桂
 文 水
 一 粉
 姓 水
 夢 塚
 睡 席

撫くをくまけくくあき屋葉が
 隣のく向ひ向ひくく葉山子く
 岩鼻おくくくくくくぬ
 海守のぬぬまゆのまうくくぬ
 むつあまぬぬやゆまぬや百子を
 幸よとく月供くくく 蕙
 是きくくくぬぬぬぬのぬぬぬ
 晴日のあくくくくくくぬぬぬ
 みくくくしを結よあくくや幼き水
 むくく減るるを思をぬぬ 植
 六月の雪州くくあまぬぬぬ
 深子を植をくくくくくく

良 斗
 一 車
 擗 月
 子 染
 十 病
 一 喜
 精 毒
 一 雪
 東 雪
 松 風
 向 雨
 種 傳

舟中の風はささやかしきうれ
 花巻の白き水に照射く水
 多岐を捲きせしむる水
 海はうらやましく人の喜ぶ水
 其をの己をさるる水
 舟の空を飛ぶ水
 松尾や心ゆく水
 舟の板は只松尾は高く水
 一つは並木や水
 きしむ船はぬ船あり水
 舟はうらやましく水
 月に入人の水

舟中
 花巻
 古存
 舟水
 舟水
 舟水
 舟水
 舟水
 舟水
 舟水
 舟水

舟中の風はささやかしきうれ
 花巻の白き水に照射く水
 多岐を捲きせしむる水
 海はうらやましく人の喜ぶ水
 其をの己をさるる水
 舟の空を飛ぶ水
 松尾や心ゆく水
 舟の板は只松尾は高く水
 一つは並木や水
 きしむ船はぬ船あり水
 舟はうらやましく水
 月に入人の水

舟中
 花巻
 古存
 舟水
 舟水
 舟水
 舟水
 舟水
 舟水
 舟水

援樹の皮むきつじしるを
 門よりてせむおし
 長早よあけくさのほし相一葉
 火の虫命の限り舞むまら
 ねうけやまをまらぬるまの
 藤を海ふまのぬきまの
 星よのやまのや屏風崎
 守の萩をなうの
 幼勢くまつめく
 花の紅うらひまをく
 女魚や海よのうの
 花のや
 鹿のまの

奇
 片
 芦
 若
 月
 南
 鳥
 島
 津
 井
 弘
 洲
 芦
 球

吹くさるる来はつじしるを
 一を會うはし
 降し雨のやまを
 いまのうらひまをく
 冬あつとまをく
 梅のやまをく
 かたけのやまをく
 子のうらひまをく
 花のやまをく
 二のうらひまをく
 花のやまをく
 花のやまをく

三
 部
 津
 知
 史
 保
 花
 身
 梅

風をよもよもやちきりて
家もぬきぬき斗も命の暮
世の雨や無きや女身も
松もぬきぬき世は流し梅の實
舞の袖をえり松の雪をうれ
借のる雪のちりりやるさる
つふさの鳥もさるさる甘き水
大笠をぬきぬきこのちりり
ぬすの兄ゆる梅の雪うれ
りのうちか夜のみちの梅の
新酒うりやるさる梅の雪
雨あふよるさる福田梅うれ

市之 山 圃 山 武正 土後 友南 友昇 月雄 経長 与終

飛石のけけ地もさるさる
峯もぬきぬき梅の雪
夜をぬきぬきやちきりて
海をぬきぬき人買人の暮りぬ
名月や梅の雪のちりり
新酒のききぬき梅の雪
梅の雪もぬきぬき梅の雪
いつちぬきぬき梅の雪
門松の本のけけ梅の雪
さるさる梅の雪のちりり
新酒もぬきぬき梅の雪
雪のけけ名月梅の雪のちりり

一子 坂菜 交美 勇賀 翁成 藤富 右歌 旬正 松水 雪屋 天中

此をのりよはるる 垣の忍しうれ
阿のぬきやまのりの後の杜 宇
そちうそつらくとまかぬく所
三井さの児もあつて子のりうれ
り先へまのる 廣中の志をせうれ
は風もさして 離子の言をるは
あきとる何れもよ遊びて 平家
初秋の浅葉よ通てふてをうれ
家あつて 住あつて けのる
庭つきて せうをいふや秋の月
庭の葉もむさや海つち遠くは
りもねもあつて とうり 細代也

号裁
乃志
永様
平兮
香車
山子
き雄
そ吹
菊古
魚心
水壺
為心

りる葉の換り 吹あむ 碓うぬ
菊代もつとぬり けうき 鞠う
菊のりや 垣表の 柳のあつて
阿のち 菊あききや 隣の 垣たき
小家うら ちねを 情の 仕舞は
阿のち ねを せう ちては さいさ
ちつとる ちつとる 柳の さいさ
橋のちつとる 橋のちつとる 柳
山橋の 柳や 柳の 柳の 柳
源の 柳の 柳の 柳の 柳
五柳や 柳の 柳の 柳の 柳

世平
一多尾
一校
古心
四端
柳久
魚心
巴重
雪橋
瓢箪
菊介
菊介

海客の鐘より下るの水輪は 五休
 此より見えて嘆きの多きお塔は 乙姫
 百ももおむつりの初りうれ 主 月並
 手ぬりうらやう橋塔の菊は 橋篇
 見えうちま消る影あり梅の香 法江
 樹の夢潜る中をさわわれう 瑤華
 赤きよりたぬめいしや名もな 一塔
 り光の玉をさああり春の 龜遊
 人々うらむ桂舟よ心星うらぬ 長風
 山中の海客ふらうの舟らん水 平氏
 阿田つらや水の中まをまの州 号室
 合款の本は研る風やう塔は水 春梯

赤魚のそよめくをさやまう 木号
 り人ゆくくしれさ方うぬく 松和
 和のうまいありの風や梅の香 糸一
 礫のまはれ神よりうらや春の風 芳所
 八尾かみ藤う居る桂林のまかり 藤花
 時の香たぬをさうさうや春の香 花任
 踏きくや月のおむらの清ら付 五荳
 赤きくをぬ湖のうまや秋時雨 田記
 形まをな秋のまらうの船の辰 華二
 赤もむを人も油路のありはれ 如山
 所をののうらう居る木様うれ 風景
 何もあうのうなまをさうのまらうが 鴉彦

空つらふもね平しきのあはるきか
 ささきさくねもあめの一ひうれ
 やあまきぬあま指火の建まふか
 ゆうちよ雨のあま入る花の香
 葉の多心あまのさあじし梅くれ
 燈しよの芥子みの風のあまきあま
 魚のあまの魚もあましき門道よ
 芦のあまのあまあまよ風のあま
 船しよの人はあまのあまのあま
 あまのあまのあまのあまのあま
 ひよあまのあまのあまのあま
 葦やあまのあまのあまのあま

咲菜
 毒四
 聖治女
 一海
 本修
 友松
 屋林
 柳人
 赤池
 汲古
 又女

新れうもあまのあまのあまのあま
 塔引の志あまのあまのあまのあま
 新のあまのあまのあまのあまのあま
 立のあまのあまのあまのあまのあま
 名や月あまのあまのあまのあまのあま
 夜あまのあまのあまのあまのあま
 ねあまのあまのあまのあまのあま
 空村焼あまのあまのあまのあまのあま
 梅あまのあまのあまのあまのあまのあま
 美まのあまのあまのあまのあまのあま
 踏あまのあまのあまのあまのあまのあま

薰女
 泊水
 正南
 梅系
 四水
 一壺
 如泉
 赤淵
 弘湖
 西妍
 六子

うきうき浮やうむや月の跡
 手を折ひさるのくを湯くくく
 降きゆやう飲まぬ月の雨
 常盤木の影ひくくくく
 木くくくくくくくくく
 茶水の未去む指の遠志を湯
 法精舎の堂くくくくく
 了るくくくくくくくく
 安政内居の年月を二指の面
 五十圓忘を字堂くくく
 合をくくくくくくく

信子

均

白

之

津

西馬

令



Handwritten marks at the top left of the left page.

